
とある魔術の錬金術師（アルケミスト）

飛鳥

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

とある魔術の錬金術師^{アルケミスト}

【Nコード】

N5881Q

【作者名】

飛鳥

【あらすじ】

人口230万人の街『学園都市』に住む高校一年生の「神代和樹」は自由気ままに学園生活を過ごしていたが…!!

プロローグ（前書き）

駄文ですがよろしく願います

プロローグ

「朝か…。」

夏の朝、一人の少年がベッドか身を起こす。その少年は時計を見て今の時刻を確認する。

「…………。」

時刻 8時25分

「寝坊しちまったー!!」

少年はすぐに着替え、家を出る。時間がないために朝食は抜きだ。

「不幸だー!!!!!!」

すると隣から絶叫が聞こえてきた。

「あいつもかよ…。てか、終業式の日に寝坊なんてどういう展開ですかー、ってんだよ!!!!」

少年が絶叫していると

「おい、和樹ー!! 待ってくれー!!」

後ろから隣に住む少年―神代和樹かみしろかずきの親友であり、クラスメイトの上条当麻がやってきた。

「お前も寝坊したのか？」

当麻が驚いた顔をしていた。それもそうだろう、和樹は学校を無遅刻無欠席の皆勤の生徒だったからである。

「なぜか、目覚ましがなかったんだよ!!」

「電池がきれてたんじゃないのか？」

「俺の目覚ましは電池じゃなくてコンセントにさして動くんだよ!! けっこう高かったのに朝起きたらなぜかぶっ壊れてたんだよ!! !あの壊れ方は落雷が落ちた時みたいな壊れ方だったから仕方ないんだけどな...。」

和樹は残念な顔をしていた。

「まあ、落雷なら、な...。(言えない...、昨日のことはこいつには言えない...)」

実はその落雷はこの上条当麻が原因でもあるが、和樹は知らない。

「今日の学校が終わったら時計買いに行かないとな...」

和樹は目覚ましがないと起きられないのであった。

因みに、こんな話をしても二人はダッシュで学校に向かった。

「……間に合った。」

「ハア、ハア……。ギリギリだったな……。」

二人は遅刻は免れた。今は自分の席で休んでいるところだった。

「カミやんはともかく、シロやんが遅刻ギリギリなんて珍しいにや。」

「ホンマやね。いつもはクラスに一番乗りしてるのに。」

この二人は土御門元春と青髪ピアス。語尾に「にゃ」を付けているほうが土御門で、変な関西弁を使ってるのが青髪ピアス。この四人はこのクラスでバカ四天王と呼ばれている。

「はい、みなさん席に着いてくださいね。」

すると、見た目12歳の女教師が入ってきた。彼女は月詠小萌。和樹たちのクラスの担任である。

「それじゃあ、大掃除のあと終了式があるので眠らないでくださいね。」

孤萌先生は和樹の方を向いて話していた。

「うーす、気をつけまーす。」

彼は居眠りの常習犯でもあった。

「あー！終わったー。あの校長、話なげーよ。」

「確かに、俺も瞼が何度も閉じかけたよ。」

今は、終了式も終り、放課後になっていた。土御門と青髪ピアスは別々に帰っており、和樹は上条と二人で帰っていた。

「なあ、ファミレスにでも行こうぜ。」

「いいな、おれも朝飯食ってないからな。」

二人は、近くにあったファミレスに入って行った。

二人はかなり多めに注文を取ったが

「なあ当麻。あそこ見てみろよ。」

その言葉に上条が視線を移すと、その先には不良が一人の女子中学生を取り囲んでいた。

「助けますか？」

「そうしよう。」

二人は、不良たちに向かって歩いて行く。

「おいおい。中学生一人になんて人数でかまってやってんですか？」

「なんだあ？邪魔だ。あっちいってろ！！」

不良の一人がどなり散らす和樹は怯まずにさらに挑発する。

「だから、遊びに誘うんなら俺たちが遊んでやるって。」

「ほう…、いい度胸だな…。」

「じゃあ行きますか？」

和樹は上条に目で合図する。

「よい…」

『『ドンッ!!』』

そして二人は同時に店の出口に向かって走り出した。

「待ちやがれえ!!」

不良たちもつられて走り出す。ファミレスには取り囲まれた女子中学生が一人取り残されていた。

「まいたか…?」

「多分…」

その後、二人は街中を走り回って不良たちをまいていった。

「なんか今日は走ってばかりだったな。」

「そうだな『あんたら、何やってんのよ?』…ゲッ」

二人は後ろを振り向いた。そこには先ほどの女子中学生がいた。

「「ビリビリ…」」

「ビリビリって言うな!!」

すると突然女子中学生は光を発した。否、雷の槍を発した。

「「ッ!!」」

二人はそれを確認する前に行動を起こした。上条は右手を突き出し、和樹はポーチからゴムの塊を取り出し、盾にして、電撃を防いだ。

「ほんとあんたらはむかつく能力持ってるわね。」

能力―ここ、学園都市では人口の80パーセントが学生で、日々、脳の開発に力を入れていた。その脳を開発して得られる力、それが超能力である。超能力を持つ者は能力者と呼ばれ、さらにレベル0〜5までに振り分けられる。しかし、高位能力者になるほどその数は少なくなっていく。レベル5とはこの学園都市の頂点に立つ者たちである。その力は一人で軍隊一つと戦えるほどだ。しかし、そのレベル5にサシで戦える人間もごく少数だが存在する。和樹はそのうちの一人だ。彼の能力は『状態変化』コンディションコントロールと呼ばれている。彼の能力はなぜか観測できないため、レベルは3ということになっている。

「それに、私には御坂美琴って言う名前があるんだから。」

一人で怒鳴っている美琴を無視して和樹は上条とアイコンタクトをとる

(どうする?)

（どうするって、そりゃ相手にしてたらきりがないぞ。）

（よし、ここは…。）

「当麻（和樹）！！後は任せた！！」

二人は同時に逃げ出した。

「てめえ！！なに俺に任せてんだ！！」

「お前だって俺に任せてんじゃないか！！お前一応レベル3なんだろう！！」

「ふざけるな！！俺に死ねって言ってるのか！！」

二人に向かって美琴は走りながら電撃を放つが、二人はそれを防いだりして逃げて行った。しかし、美琴は逃がすつもりはないのか追いかけた。この逃走劇はその周囲にある電化製品をだめにしながら夜更けまで続いた。

$$\begin{array}{r} > \\ i \\ 1 \\ 8 \\ 1 \\ 3 \\ 1 \\ \hline 2 \\ 4 \\ 4 \\ 8 \\ < \end{array}$$

プロローグ（後書き）

アドバイスや感想お願いします。

オリキャラ紹介

「神代 かみしろ 和樹 かずき」

身長183？ 体重72kg 髪は黒色で若干長めだが、紐で結んだりはしていない。

年齢16歳 髪は短めでボサボサにしている。（本人曰く癖が強すぎて寝癖がなおらないのでそのままにしているとのこと）身体能力は凄まじい高さでビルの2～3階までの高さなら軽々と上ることができるが普段はあまり使わない。また、体術、剣術、槍術等の武術にも精通している。特に槍術に関しては右に出る者がいないほどの腕前。

趣味は昼寝、音楽鑑賞。当麻と同じくらいのお人よしだが、今までにフラグが立ったことはない。両親から渡されたお守りを肌身離さず持っている。

『コンディショントロール
状態変化』という能力を持つ。

様々な物質、を自分の思った通りに変化させることができる。（ただし、例外あり）その効果は半径20メートル近くにある物すべてに使用することができる。また、空気中の塵などを操作して大火力の火を起こしたり、電気を操ったり、水分を凍らせたりすることも可能。また、やろうと思えば皮膚を操作して傷を塞ぐこともできるが、能力とは関係なしに神代は回復力が早いので滅多には使わない。

この能力については科学的には何もわかっていないため、正確なレベルの判定ができない。しかし、本人は難なく扱えているため暫定的にレベル3の判定となっている。

学園都市では『物質を操る錬金術師』という都市伝説にもなっている。

オリキャラ紹介（後書き）

主人公の初期設定です。物語が進むにつれてオリキャラも何人か出ていきます

第一話（前書き）

では、第一話スタートです！！

第一話

7月20日

「暑…」

まだ朝なのに俺——「神代和樹」——の部屋はうだるような熱気が支配していた。

「エアコンがぶっ壊れてるし…」

買ったのは確か去年の夏だったよな…。ぶっ壊れるの早くね？

因みにエアコンが壊れた理由は昨夜付近に落雷が落ちたためであった。しかし、和樹はこの事実を知らない。ついでに隣に住んでいる「上条当麻」がカップ焼きそばの麺を流し台にぶちまけ、財布を探しているうちにキャッシュカードを踏み碎いたことも知らない。

「ハア……。布団でも干しておくか……」

和樹はブルーな気持ちで布団を干しにベランダに出て、布団を干し部屋に入るときに当麻の部屋のベランダから悲鳴が聞こえたのでそちらに視線を向けた。

「……………」

そして空いた口がふさがらなくなった。その視線の先には当麻が何か白い修道服を着た少女に腕を食われてい光景だった。

「当麻…。」

「おっ、和樹か。すまんけどこれを引き剥がすのに手貸してくれないかな？」

「最期になに言い残すことはあるか…？」

「あゝ、和樹さん？これには深い訳が…ってギャー！！！！！！」

今日も当麻の悲鳴で一日が始まった。

「まずは自己紹介しなくちゃいけないね。」

「…………いや、まずはなんであんなトコに干してあったのか——
——」

「私の名前はね、インデックスっていうんだよ？」

「なんで疑問形？」

「その前に、誰がどう聞いても偽名じゃねーか！大体何だインデックスって！『目次』かお前は！」

突っ込みを入れるのは当麻だ。因みに俺は当麻の部屋に上がり込んでいる。

「見ての通り教会の者です、ここ重要。あ、バチカンの方じゃなくてイギリス清教の方だからね。」

「チョイ待て、なんで教会の人がベランダに干されてたんだよ？」

俺はインデックス？（偽名の可能性大）に俺の部屋から持ってきた菓子パンを渡す。

「ありがとう。モグモグ…。因みに干してあった訳じゃないんだよ？」

「じゃあ何だ？風にでも流されてきたのかよ？」

「……、似たようなモノかも」

「「……は？」」

俺たちはインデックスの顔を見る。

「落ちたんだよ。本当は屋上から屋上に飛び移るつもりだったんだけど。」

確かにここら辺は建物が密集しているから出来ないことはないだろうが、ってそういうことじゃねー!?

「なんでそんなことしたんだよ? 一歩間違えば地獄行きじゃねーか」

「あの時はそうするしかなかったんだよ。他に逃げ道はなかったんだもん。」

「逃げ、道？」

「うん」

俺たちの言葉にインデックスは頷いた。

「追われてたからね」

第一話（後書き）

どうも、第一話をお送りしました。

基本、禁書目録沿いにいきますのでよろしく。次はいつ更新になるかな……

第二話（前書き）

第二話スタート！！

第二話

「追われてたからね」

「「……………」」

朝飯を作っていた当麻の手の動きが止まり、俺も開いた口が閉じなかった。

「本当は飛び移れるはずだったんだけど、飛んでる最中に背中を撃たれてね」

インデックスは笑っていた。

「ゴメンね。落っこちて途中で引っかかったみたい」

彼女は皮肉でもなく、ただ俺たち…、いや、当麻に微笑みかけるために。

「撃たれたって…、」

当麻が心配そうに聞いてみる

「うん？ ああ、傷のことなら心配ないよ。この服、一応『防御結界』の役割もあるからね」

「——は？ ボウギョケツカイ？ ナニソレ？ 防弾チョッキの類の何かか？」

「……………」

俺たちに服を見せるために回転するこのシスターさんは確かにけが

人には見えない。マジで撃たれたのか？こんなことを信じろと言われても今なら万引きした時の言い訳の方が信じられる。万引きを肯定してるわけじゃないからね、一応。しかし、この少女が当麻のベランダに引っ掛かっていたことは事実なのだ。つまり屋上から飛び移ろうとしていたことは本当のことだ。しかもここは八階建ての学生寮だ。落ちればすぐに人間ミンチの出来上がりだ。それを恐れずに行うということは追われていたのは本当なのか？

「ごはん」

いつの間にか一人考え込んでいたようだ。インデックスは当麻の背中から当麻のもつフライパンの中を見つめていた。

「……………あ」

当麻のが困った顔をしている。さてはこいつ、冷蔵庫の中のだめになった食材を使っていやがったな。

「あ、あーっ！け、っどあれだ！そんなにおなかすいているならこんな残り物ぶっ込んだいかにも不味そうな男料理じゃなくてキッチンとファミレスとか行こう！何なら出前でもいいし！」

やっぱり、わかりやすい奴だなあ。

「そんなに待てないよ？」

「それにまだ開いていないと思うけど？」

インデックスと俺はそれぞれ当麻に突っ込む。

「……………あ、かつ！」

「それに不味そうなんかじゃないよ。私のために無償で作ってくれたご飯だもん。美味しくないはずがないんだよ？」

なぜだろう？インデックスからきらきらのマークが見えるのは気のせいかな？

そして何だろう、俺は何か大切なことを忘れている気がする。

「……………ぐ、……………う、う、ううおおおおおおおおあああああああああ！！！！」

なんだか向こうが五月蠅くなってきたな話を元に戻すか

「で？お前は何に追われてたんだ？」

当麻が口の中を生ごみでいっぱいにしていたので俺が聞いてみる。

「うん……、何だろうね？薔薇十字か、ローゼンクロイツその手の集団だと思うんだけど、名前までは分からないかも。……連中、名前に意味を見出すような人たちじゃないから」

「「連中？」」

つまり相手は一人じゃないという訳か

「魔術結社だよ」

「……………」

.....」

「はあ。まじゅつって……、はあ なんじゃそりゃあ!! ありえねえっ!!」

「え? まじゅつ? それって何?」

「あれ? 日本語おかしかった? マジック魔術だよ、マジックキャバル魔術結社」

「.....」

当麻がまたしても固まった。多分英語じゃますます分からなくなっただろうな。俺は英語はある程度話せるからわかるけど:

「-----」。ゴメン、無理だ。魔術は無理だよ。俺もパイロキネシス発火能力やステータスコントロール状態変化とかいろいろ『異能の力』は知ってるけど、魔術は無理だ。」

「……………」

インデックスは小さく首を傾げた

「学園都市じゃ超能力なんて珍しいもんじゃないんだ。人間の脳なんか静脈にエスペリン打って首に電極貼り付けて、イヤホンでリズムを刻めば誰だって回線を開いて『開発』することができるんだ」

「……………」

俺が説明してもインデックスは首を傾げたままだった。

「一切合財が科学の力で証明できるから、誰だって認めて当然って話だ」

俺の言葉に続いて当麻が説明する。

「…………よくわかんない」

これでも駄目か……………」

「当然なの！当然なんだよ当然なんです三段活用！」

「…………。じゃあ、魔術は？魔術だって当然なんだよ？」

インデックスはふてくされているようだ！！

「えーと、例えばジャンケンってあるだろ？ってか、ジャンケンって世界共通？」

俺に振ってきやがった。

「アメリカにもあるからそうなんじゃねえの？」

「日本文化だと思うけど、知ってる」

「じゃあ、ジャンケンを10回やって10回負けた。そこに何か理由があると思うか？」

ここら辺の説明は面倒なので当麻に丸投げしよう。俺はもしもの時

にどうするかを考えておこう。

「…い、……樹。和樹！」

「ん？ああ、悪い。寝てた。」

「全く…。なんかこいつが超能力を見せろって言うから、見せてやってくれないか？」

「はあー、いつもなら断ってるんだけどな……仕方ない。」

「早く見せてみてよ。」

「そうせかすなよ」

俺はポケットからゴムの塊を出すと、テーブルの上に置いた。

「よく見てろよ」

パンッ！俺は一度両手を合わせてゴムにかざす。するとゴムの塊は見る見るうちに形を変え、ゴム製のナイフになった。

「これが俺の能力だ」

「本当にあるんだね。疑ってゴメン」

「いや、信じてくれたんならいいよ。ところで当麻、なんでお前は齒形が全身についてるんだ？」

するとインデックスは真っ赤になり、当麻は

「それは俺がこいつの服をぶっ壊してしまったからだよ…」

なるほど、つまり幻想殺しでぶっ壊れたということは、魔術ってのは本当にあるんだな…。それはそうと

「死ぬ覚悟はできたか？当麻」

「え！？ちょっと何を振りかぶっているのかな和樹さん？そんなものが直撃シタラ…ってギャー！！！！」

俺が当麻の処刑を行っていると俺の電話が鳴る

「はい？」

『神代ちゃん、いつになったら来るのかなあ？先生は悲しくて泣いちゃいますよー？』

やべ…、補修忘れてた。

「当麻、補修のこと忘れてないよな？」

「え？ああ！！そーだ補修だ補修！」

準備をしながら当麻はインデックスに向かって言う

「えっと、俺らこれから学校行かなきゃなんないんだけど、お前どーすんの？ここに残るんなら鍵渡すけど…」

ちい！このフラグ一級建築士が！！

「……………いい、出ていく」

何だろう…インデックスから負のオーラが見える

「あっ、あー……………」

「違うんだよ？ここにいると連中ここまでやってきそうだし、君たちだって部屋ごと爆破されたくないでしょ？」

確かに部屋ごと爆破は御免だが……………

すると、当麻が持ち前の不幸を発揮し、足の小指をぶつけるは、携帯の画面が割れるは残念なことばかり起こった

「当麻、ドンマイ」

「うう…、不幸だ……」

「不幸というより、ドジなだけかも」

「『どういうことでせう？』」

「うん、こういう魔術こっちの話なんて君たちは信じないと思うけど、神様のご加護とか、運命の赤い糸とか、そういうものがあつたら君の右手はそういうものもまとめて消してしまつてるんだと思うよ？」

「待てよ、幸運だの不幸だのは確立と統計の話だぜ？んなのがある訳…、ッ！」

急に当麻が身を震わせたと思いきや、いきなり悶絶し始めた。面白！

「君の右腕が本物なら右腕があるだけで『幸運』ってチカラもどんどん消していつてるんだと思うよ」

「つまり、あれですか？」

「うん、君の右腕が空気に触れているだけで、バンバン不幸になっていく訳だね♪」

「ぎゃあああああああああ！不幸だあああああああ

爆笑もんだなこりゃ。当麻のことを思って笑わないけど

「というか、行く宛てあんのかよ？魔術そうちの事情は知んないけどよ、その魔術師…だっけ？そいつらがいるなら当麻の部屋で隠れておけばいいだろう？」

「ここにいたら『敵』が来るからね」

「なんで断言できるんだ？」

「この服、『歩く教会』は魔力で動いてるからね————教会は神力って呼ばせたいみたいだけど、同じ力マナだしね。連中はその魔力をもとに探知サーチをかけてるみたいなんだよね。」

「つまり、年がら年中発信機を付けてるって訳か。でも、さっき当麻の幻想殺し（イマジンブレイカー）に壊されたからその機能もなくなっただけじゃねえのか？」

「この服の防御は絶対だったから、相手も手を出してこれなかったけど、それがなくなったら、絶対に打ってくると思うんだ」

「「けどよ…！」」

俺と当麻は一緒に反論しようとするが

「じゃあ私と一緒に地獄の底まで来てくれる？」

その顔は笑顔だった。しかしその顔の裏では「こっちにくるな」と言っているのがよくわかった

「……………何か困ったことがあったらまた来いよ」

「うん、お腹すいたらまた来るね」

そう言ってインデックスは去って行った

その日、当麻は一日中ボーとしていた。たぶんあのシスターのことを考えてたんだろうなあ。

今は放課後で俺は一人で寮に帰っている。当麻あのビリビリに追いかけられていった。

「ん？」

当麻の部屋の前には女性がいた。後ろ姿だったが、身長は俺と同じか少し低いくらい、髪は背中に一まとめにしていた。そして、腰には2mほどの日本刀……。

「…日本刀？」

そしてその下には水たまり、いや血だまりが出来ていた。その血だまりの中には今朝であったシスター——インデックスが倒れていた。

「インデックス!？」

「!？」

俺がインデックスの名前を叫ぶと同時に女性は驚いたように振りかえった。

「あんた、インデックスに何をしたんだ!!」

「クッ……『七閃』!!」

そう女が叫ぶと俺に向かって『何か』向かって来る

ヤバイ!?

次の瞬間、和樹の姿は土煙の中に消えていった。

第二話（後書き）

さて、どうでしたか？

次は戦闘シーンですお楽しみに！！

第三話（前書き）

それでは戦闘前の会話です

第三話

「何で…、『歩く教会』の機能が…」

彼女…、「神裂火織」は神代たちの寮の近くの建物の屋上で一人呟いた。

「『歩く教会』の力は法王級のもの…。それがなくなっていたなんて…。それにあの少年も…」

彼女…、「インデックス」の知り合いなのかはわからないがたまたま居合わせてしまった少年に向かって『七閃』を放ってしまった。世界に二十人しかいない聖人の放った攻撃だ。恐らくただの高校生が生き残れるはずがない。と、考えていると

「見つけたぞ!!」

「え!?!」

神裂の背後からそんな大声が響き、隣の建物の八階から神裂のいる建物の屋上に向かって跳んでくる少年の姿が視界に入った。

.....
数分前
.....

「クッ、『七閃』!!」

ヤバイ!?

その直後、俺は手すりの状態を変化させ、即席の檣を作り、身に迫る『何か』を檣で軌道をずらし、なんとか持ち堪えた。

「クソッ！」

土煙が晴れると日本刀を持った女は消え去っていた。和樹は下を覗き込むと、上条が来ているのが見えたので和樹はインデックスのことは当麻に任せようと考え、階段を登り八階に向かう。上から見たほうが捜しやすいと和樹は考えたが相手は隣の建物の屋上にいるのが和樹の視界に入った。

（隣まではざっと8m、屋上まで行っても間に合わねえ！だったら
！）

和樹は手すりに足をかけると一気に跳んだ。

「見つけたぞ！！」

そのまま隣の建物の屋上に着地する和樹と和樹がやって来た事に驚きを隠せない神裂。

「あなた、生きていたのですか…。」

「勝手に殺すな。」

和樹は怒りに満ちた声を出す、神裂の強さを肌で感じていた。「コイツはヤバイ」と、本能が逃げろと言いつけるのを和樹は故意に押さえつけていた。

「デメエ、インデックスが言っていた魔術師か…。」

和樹は槍の切っ先を神裂に向けたまま訪ねる。

「聞いていましたか。私は神裂火織。あなたの名前は？」

「神代和樹だ。」

「神の代わり…。いい名前ですね。では、本題です。私たちは彼女を…、インデックスを保護したらすぐに立ち去りますので手を出さないで欲しいのです」

「嫌だと言ったら…？」

「魔法名を名乗らせてもらいます」

「魔法名…？」

「我々魔術師は魔術を使う時には真名を名乗ってはいけない事になっています。簡単に言うと『殺し名』です」

「へえ…。なら、魔法名とやらを名乗ることになるな…」

和樹は槍を床に突き刺し、立て槍に手をかざす。

「仕方ありませんね…『Salvare000』！！」

神裂が魔法名を名乗ると、彼女の纏う空気が変わった気がした。

「まったく…、何で俺はこんな奴を相手にしようとしたんだろうな…」

和樹は刺していた槍を引き抜く。その槍は切っ先の形が細い刃が十文字に、変わっていた。

「だけど、あんな娘を見捨てるなんて俺にはできないんでね！」

その瞬間、和樹の持つ槍が蒼^{あお}い焰を纏い燃え上がる。

「焰^{えん}槍、『蒼焰^{そうえん}』!!」

「できれば争いはしたくなかったのですが…」

「もう遅いな。俺には譲れないものがあるからな」

「なるほど、それがあなたの戦う理由ですか…。ならばあなたを倒して彼女を回収させてもらいます」

神裂は刀を構え

「させねえよ!」

和樹は常人では考えられない脚力で飛び出す。

第三話（後書き）

次回はVS神裂戦です

第四話

「させねえよ！」

神代は常人には考えられない脚力で飛び出し、神裂に向かって、焰の斬撃を放つ。

「超能力はそんな事もできるのですね…、ですが…」

その瞬間、焰の斬撃は何かに切り刻まれて消えていった。

「私の『七閃』の前では無意味です」

（オイオイ…、なんつー速さだよ！？）

神代には神裂が一瞬刀を抜き、また戻したのがかろうじて見えていた。つまり、自分と彼女の力の差をはっきりと理解したのだった。

「飛び道具が効かないなら、直接攻撃で！」

神代は槍の間合いで攻めようとするが、神裂の放つ『何か』に阻まれてしまう。

「ク…、ソッ！」

神代はなんとか『何か』を防ぐが槍は七つに切り裂かれてしまう。

「諦めませんか？今ならまだ間に合いますが？」

「最後まで諦めない。それが俺の生きる道だ！」

「では、仕方ないですね…。腕の一本でも頂くことにします。『七閃』！」

神裂の腕が一瞬だけブレ、『何か』が神代に向かって放たれる。

パシッ！

「南無三！！」

神代は祈るように一度手を合わせ、『何か』に手をかざす。すると、『何か』は形を変え球体になり神代の手の中に収まっていた。

「なっ！？」

驚き、目を開く神裂。

「いっ…！なるほど…、金属製のワイヤーか…」

球体に変え損なった二本のワイヤーが神代の両腕を掠め、血が流れていた。

「『七閃』をあんまり方で防ぐなんて…」

（し、死ぬかと思ったーーーー！！！！！！）

完璧にとまではいかなくても神代は確実に『七閃』を防いだのだが、さすがに心中では恐怖してみたいだ

「しかし、まだ『七閃』を攻略しただけのこと…。この先には真説の『唯閃』が待っています。今のあなたでは私に勝てませんよ」

「やってみねえとW∴「それに∴」えっ？」

神代の言葉を遮り話す神裂

「今頃、私の連れが彼女を回収しているところでしょうから」

その瞬間、神代たちの寮から爆発が起こり、炎の巨人が現れる。

「!？ステイル……？なぜ『魔女狩りの王』イノケンティウスを……？」

その言葉を聞いた瞬間、神代は全てを理解した。

「あー、魔術そうちの事はわからんが、多分おまえの連れはかなりヤバい奴を相手にしてるな」

「ヤバい奴…？」

「ああ。この学園都市で最弱きじょうの男だからな、当麻アイツは」

一旦言葉を切ると、神代は息を整える

「さて、俺のやることも決まったからな……。真面目にやりますか！」

「ですが、あなたには武器がありませんが……。まさか素手で私を倒せると思っているのですか？」

「倒すつもりは無いよ。俺はあいつがインデックスを助けるまでおまえをあっちに行かせない事だ。それに武器が無い訳じゃねえよ。」

神裂は「何を…」と言ったような顔をしているが、鞘に納めたまま日本刀を構え、神代に向かって振り下ろす。

「人間の80%が何でできているか知ってるか？」

神代は立っていた。神裂の攻撃を二本の刀…、血で作られた日本刀で受け止めていた。

「さあ、反撃開始だ！」

そのまま神代は神裂の刀を押し返す。神裂は残っている『七閃』で攻撃してくる。神代は刀身を滑らせワイヤーを断ち切る。

「止めときな。そんな細いワイヤーじゃ、俺の刀は斬れねえよ。そ

れにおまえの速さにはもう慣れた。」

そう言って神代は神裂の懷まで潜り込み、刀を一閃する。

「クッ！」

神裂は刀で神代の攻撃を受け止めていたが、少し押されていた。

（なぜ、この少年は私の攻撃を受け止めただけでなく、『七閃』を断ち切り、更に私の力を上回る力で押し込んでこれるのですか！？）

神裂は少なからず、混乱していた。彼女は世界に二十人しかいない聖人の一人なのだ。その彼女を倒せるのは同じ聖人にしかできない。なのに、目の前の少年はただの高校生、しかも魔術については素人なのだ。

「クッ!？」

神裂は身体を反らすと、着ているTシャツの袖がわずかに切られていた。

「貴方は一体なんなのですか？」

「ただの高校生だよ。お人好しのな」

その直後、神代たちの寮を覆っていた炎が消えた。

「そろそろか、な！」

神代は手を地面につける。瞬間、神裂の目の前で強烈な閃光が放たれる。

「しまった…!?!」

少々頭が混乱している中での不意討ちだったので神裂はもろにその閃光を見てしまい目を潰された。

「目的は達したんでね！じゃあな！！」

神代はそのまま屋上から飛び降り、同じく逃げてきた上条に事情を話しその場から去って行った。

普段から何かと追われていた二人は逃げ足も早く、いつの間にか姿を消していた。

「逃げられましたか……。一旦、ステイルと合流しなくては……」

目も回復し、立ちあがった神裂は周りを見渡し神代を探すが既に姿はなく探すのをあきらめる。

「『神代和樹』……。彼は一体？」

そう呟き神裂はその場から姿を消した。

第四話（後書き）

どうでしたか？感想、ご意見お待ちしております

第五話

「当麻！インデックスは！？」

神代と上条は彼らの寮からかなり離れた路地裏に来ていた。インデックスは上条が背負ったままだ。

「かなりやばそうだ。けど救急車に乘せたりする訳には…」

ここ学園都市は基本的に『外からの人間』を嫌う傾向がある。そのために学園都市の周りを壁で囲い、宇宙からは三基の衛星が監視の目を光らせているほど徹底している。外から来るコンビニのトラックも専用のIDがないと話にならない。

「しかもインデックスは『外から来た人間（部外者）』だ。病院なんかに入院したらあつという間に情報が広がっちゃう…」

「それに相手は組織だ…。もしインデックスが手術中に入り込まれたりしたら、防ぐことができない……」

「けど、このままって訳にもいかないよなあ…」

悩む彼らにインデックスが話しかけた。

「だい、じょうぶ……。だよ…？とにかく、血を…止めることができれば……」

インデックスの口調は弱々しく、神代は、『俺がもっと早く来ていれば…!』と自分を罵っていた。その間にも上条とインデックスの会話は進んでいく。

「おい! お前の頭の中には何かないのかよ! ?」

「頭の中?」

インデックスが10万3000冊の魔道書があることを知らない神代は、首を傾げた。

「ある…、けど…。君には、無理…、だよ……。私が術式を教えて、君が完璧に真似した所で……。痛っ、君の能力が、術の邪魔をする」

上条は自分の右手を見て愕然とする。

「また、この右手が悪いのかよ!!」

「落ち着け! だったら俺がやる! 俺には当麻みたいな能力はないから出来るはずだ」

「ううん…、右手がどうかの問題じゃなくて…『超能力者』っていうのがもう駄目なの…。魔術ってのは…、君達^{エスパー}みたいに『才能ある人間』が使うためのものじゃないんだよ…。『才能ない人間』が…、それでも『才能ある人間』と同じ事がしたいからって…、生み出された術式と儀式の名前が魔術…。」

「そうか…。」

愕然としている上条をよそに神代は納得したような声を出す。

「なにか気付いたのか、神代…？」

「分からないか…、当麻？『才能ある人間』と『才能ない人間』は、回路が違うんだよ…。『才能ある人間』では『才能ない人間』の^{システム}のために作られた魔術を使うことができないってことだよ…！」

「なっ…!?!」

「俺たちの脳は電機や薬なんかで無理やり脳の回路を拡張しているからな…。普通の人間と体のつくりが違うといったら確かに違うかな…。しかも、ここは学生の街…、人口の80%は学生だ…。その中に能力開発の『時間割』カリキュラムを受けていない学生なんかいるわけがない…」

「ち、くしょう…、そんなのって、あるか。そんなのってあるかよ!ちくしょう…、何なんだよ!なんでこんな…ッ!」

犬歯をむき出しにし獣みたいに吠える上条に向かって神代は言葉を繋ぐ。

「落ち着け、当麻！！絶望するのはいいが、残念なお知らせがある」

「何か分かったのか？」

「ああ。インデックス、魔術は『才能ない人間』になら誰にでも使えるんだな…？」

神代はインデックスに向かって話す。

「え…、うん」

「ここまで来て『魔術の才能がないから出来ない』なんてオチはないよな？」

「大丈夫、だよ…。あの程度の魔術は…、方法と準備さえできれば…、中学生にも出来ると思う…。確かに手順を間違えれば脳内回路と神経回路を全部焼き切る事になるけど、…私は10万3000インデックス冊だから、へいき。問題ない」

そして、上条も途中で気づき、神代とふたりで笑った。二人は空を見上げながら笑った。

まるで………

夜空の月に向かって吠えるように………

「つまり、俺たちを開発する側の教師たちは一般人のはずだ。」

そう、ここ「学園都市」は学生の能力開発を行っている。逆に能力を開発する側…、つまり先生たちは能力の開発はしていない。

「あの先生、この時間でもう眠ってるなんてことはねえだろうな…」

「さあ？どうだろうな…、まあ寝てても起きてもらうしかないな…。
案外俺たちがいきなり訪問したら部屋の中がビール館だらけだった
りして…」

二人は、インデックスを連れて夜道を歩きだす……………。

第五話（後書き）

今回は一度書いたのに間違っ
て消してしまった…。

次回はあの先生の登場です！！

第六話

神代の携帯電話で青髪ピアスから月詠先生の家の住所を聞き出し、二人は歩きだした。

「ここか？」

「ここだな。住所はあつてる…」

そこは路地裏から15分という所にあつた。何というかよくいえば年季の入ったアパート、悪く言えばボロいアパートだった。通路に洗濯機がドンツ！と置かれているのを見れば、ここには風呂がないという事がよくわかる。いつもならこれだけで10分以上笑う事が出来る二人だったが、今日は笑う気にもならない。

「あつた…」

神代は『つくよみこもえ』と平仮名で書かれた表札を見つけると上条を呼び、チャイムを三回鳴らす、出る気配が全くないので上条に少し離れるように言々とパンツ！と手を合わせる。

「いつもならこんなことはしないんだが時間が惜しいからな…！」

神代はドアに大穴を空けるつもりでドアに触れようとしたが…

パンツ！（ドアが勢いよく開く音）

ガンッ！！（開いたドアが神代の鼻に直撃し、神代をノックアウトする音）

バターンッ！！（そのまま神代が倒れる音）

「御免なさい。ドアだけは対新聞屋のように頑丈に…、って神代ちゃんに上条ちゃんじゃないですか。新聞屋のアルバイトですか？」

「シスター背負って勧誘する新聞屋がどこにいる？」

「あゝ、痛っうゝ」

上条は小萌先生にツツコミ、神代は鼻を押さえて立ち上がる。

「ちょっと色々困ってるんで入らせてもらいますね先生。はいごめんよー」

「ちょ、ちょちょちょーっとなーっ！」

グイグイと横に押されていた小萌先生は慌てて上条の前を塞ぐ。

「せ、先生困ります、いきなり部屋に上がられるのは。いえそのつ、部屋がすごい事になってるとか、ビールの空き缶が床に散らばって

るとか灰皿のタバコが山盛りになっているとかそういう事ではなくてですね！」

「先生。当麻が今背中に抱えるモノ見て同じギャグが言えるか試してみてください」

神代が当麻の背中を指差す。

「ぎゃ、ギャグではないんですー……って、ぎゃああ!？」

「「今気づいたんですか!」」

「上条ちゃんの背中が大っきくて怪我してるって所まで見えなかったんです！」

「さいですか」

神代はあたふたしてる小萌先生を押し分け、部屋の奥に入っていく。

「うっ…」

神代は部屋の様子を見て絶句していた。なんていうか賭けごとが好きなおじさんの部屋というのがぴったりの部屋だった。ボロボロの畳の上にはビール缶が大量に置いてあるし、灰皿の中には煙草の吸殻が山盛りになってあった。

「さっきのギャグじゃなかったんですね…」

「こんな時に言うのもなんですけど、タバコ吸う女の人嫌いなんですー？」

「はあ…、当麻」

神代はビール缶を蹴飛ばし人が寝るには十分なスペースを作り、当麻に呼びかけた。

「おう…」

当麻はインデックスを傷が床に触れないように寝かせた。

「きゅ、救急車は呼ばなくていいんですか？で、電話なら…、つて、あれ…？」

小萌先生が当麻に電話を勧めるが、小萌先生の指の先には電話はなかった。

「あれれ？確かにここに置いていたんですけど……？……？……？」

「出血に伴い、血液中にある生命力マナが流出しつつあります」

ギクツ、と三人はインデックスを見た。

「警告、第二章第六節。出血による生命力の流出が一定量を超えたため、強制的に『自動書記』ヨハネのペンで目覚めます。……現状を維持すれば、ロンドンの時計塔が示す国際標準時間に換算して、およそ一五分後に私の身体は必要最低限の生命力を失い、絶命します。これから私の行う指示に従って、適切な処置を施していただければ幸いです」

神代と小萌先生はギョツとした顔でインデックスを見た。上条は無理もないと思った。彼もこの声を聞いたのは二度目だが、この声は聞き慣れることはできない。

「ふむ…、先生先生、非常事態なんで手短に言いますね。」

「なんでしゅか？」

小萌先生の顔は若干引きつっていた。インデックスの傷を見たら誰でもそうなるだろう…。

「今から俺と神代で救急車呼んできますんで、先生はその間、この子の話を聞いて、お願いを聞いて…：とにかく絶対、意識が飛ばないように。この子、服装通り宗教やってるんで、よろしくです」

小萌先生は蒼白な顔のままコクコクと頷いている。

「なあ、インデックス、何か俺にやれることはないのか？」

「あり得ません。この場における最良の選択は、あなたがこの場を去る事です。それから、あなたも」

インデックスは神代の方を向いて言う。

「俺も？」

「はい」

「じゃ、先生。俺らそこまで走って電話してきます」

上条は神代を手招きして外に出る。

「なあ、神代」

「なんだ…？」

ドアを閉めて上条は神代に話し掛ける。

「小萌先生の電話消したのお前だろ？」

「よくわかったな…」

神代は驚いた感じで答える。

「あのままだと小萌先生、電話しそうだったからな」

「……サンキュ」

「いってことよ。それよりこれからどうする？」

神代は上条に聞く。

「俺はもう少し離れるよ。ここにいて失敗したらたまんねえからな」

「じゃあ俺はここにいるかな」

「ああ…、頼む」

「あ、出来れば包帯買ってきてくれ。さっき怪我したんだよ」

「了解…」

そう言って上条は夜の街中に歩いて行った。一方、神代は上条の姿が見えなくなって一分後に夢の中にトリップしていった……………
…。

第六話（後書き）

ご意見、感想、アドバイス等ありましたら、お願いします

第七話

気がつく、俺は辺り一面白一色の場所にいた…。あ、雪景色じゃねえぞ。本当に真っ白な空間なんだ。

「つと…、そんな事よりなんでこんな所に来ちまったんだ？」

「それは自分^{てめえ}がよく知ってるだろうがよ」

俺は後ろから声が聞こえたので後ろを振り向き、声の正体を見た。そこに居たのは…

「俺…？」

俺だった。容姿はそのままでもそっくりだった。唯一違うのは、そいつの顔が好戦的な笑みを浮かべていたところか…。

「ああ、そうだよ。オレはお前だ。久しぶりだなあ、もう一人のオ

レ」

「久しぶり…？俺はお前なんか知らねえぞ…」

これは本当だ。本気と書いて本気^{マジ}と読む。すまん、話を戻すから、その殺気止めてくれ。

「はあ…、まあ覚えていなくても仕方ないか…。オレもこんなに早くお前に会うつもりはなかったんだよ…」

なら、会うなよ…。こっちだって忙しいんだ。

「そう言うなよ…。オレとお前の仲じゃないか」

知り合ったのはついさっきだ…！それに、俺はお前みたいな奴とは知り合いになりたくはなかった。

「ハッハッハッ！つれねえなあ！？オレとお前の関係知りたくねえのか？」

知りたくない。

「バツサリ!？」

どうせ夢オチだろ? そんなの聞いたところで意味は無いからな。

「ったく…、オレと違ってノリが悪いなあ…。まあ、そろそろ時間だ。また会おうぜ、オレ」

俺は会いたくねえよ。

俺はオレにそう答えると、歩き出したが…

パカン! (床が開く音)

「夢オチだけに、オチってね!」

——うまくねえんだよおおおおお!!

「うわぁ!?!」

あれ?ここは...?なんかビックリしている当麻とインデックスがいる。ああ、ここは小萌先生の部屋か…。

「てか、俺、外で寝てたんじゃなかったっけ?」

「俺が部屋に運び込んだんだよ。ついでに腕の手当てもな」

俺は自分の腕を見る。そこには、包帯が巻かれていた。

「その傷、なんか刃物で切ったみたいになってたけど、どうかしたのか？」

「ああ、ちょっと…、な」

「ねえ、とうま。今日は補修無いの？」

インデックスがとうまの名前を呼んでいる…。今日の殺るべき奴が決まった。

「なあに、補修なんかやらなくても…、って、神代さあん！？なに物騒なモン作って俺に殺気を向けているんですかぁ！？」

「うるせえ！！このフラグ乱立野郎があ！！」

俺は近くにあった金属を作り変え、大太刀を作り当麻に振り下ろす。

「…クッ！」

当麻が右手で太刀を受け止めると太刀はバラバラになり、ただのガラクタになる。

「まったく…、その能力^{チカラ}って反則だろ…」

「不幸だ…」

そんな大騒ぎを俺たちは送っていた。

そのドタバタ騒ぎを600m離れた場所から双眼鏡を覗いて観察している人物がいた。赤髪の長身の男―イギリス清教の魔術師のステイル・マグヌスだ。彼は一旦双眼鏡を覗くのを止める。

インデックス
「禁書目録に同伴していた少年たちの身元を探りました。禁書目録（彼女）は？」

ステイルの背後に神裂が歩いてくる。ステイルは彼女に振り向かず、答える。

「生きてるよ。だけど、生きてるとなると向こうにも魔術の使い手がいるはずだ。しかし、神裂、アレは一体なんだ？それに、君の相手をしたという少年は？」

ステイルは不機嫌そうに訪ねる。

「まず、貴方の方ですが、それほど彼の情報は集まっています。魔術師や異能者といった類ではないということしか…」

「じゃあなにかい？アレがただの高校生だっていうのかい？止めてくれ。それでも僕は力のあるルーン文字を開発した魔術師だ。何の力も持たない素人が裁きの炎を退けられるほど世界は甘くない。君の方はどうだったんだい？」

ステイルは口にくわえたタバコを吹かし、神裂に聞く。

「あの少年についてはそれなりに情報が集まりました。名前は『神

代和樹』。性格は明るく、あの少年とは親友関係にある。いつも厄介事に巻き込まれるが、年少の頃に修得した武術で切り抜けている…」

「ふん…。ただのケンカっ早い高校生か…」

「ただし、彼の能力は…」

神裂が言ってもいいのかと言った顔をしていた。

「どうかしたのかい？」

「彼の能力は…、その…まるで錬金術のようで…」

「錬金術？何を言っているんだい？あれは十四世紀の技術だろ？」

「ですが確かに…」

「もういいよ…」

そう言ってステイルは双眼鏡に目を戻す。それに習って神代たちの騒ぎを見る。上条の頭にかじりついているインデックス、それを煽る神代、噛みつかれている上条。

「楽しそうだね…。彼女はいつも楽しそうに暮らしている…。僕はいつまであれを引き裂かないといけないのかな…」

「つらいですか…？ かつてあそこにいた貴方は…」

「いや、もう決めたからね。彼女を外から守るって…」

双眼鏡を覗きながら答えるステイル。神裂は視力は8.0あるので双眼鏡は使っていない。

「「なっ!？」」

彼らが目にしたのは、インデックスと遊んでいた少年の一人…。神代がしっかりとこちらを見ていたのだ。

「じゃあ、当麻。俺は部屋に戻っておくから、なにかあったら連絡しろよ」

「ああ。わかった」

「じゃあね、かずき」

あれ？いつの間にか俺も名前で呼ばれてるし…。

俺は外に出ると、さっきみた神裂たちの姿を思い出す。

「さて…、どうなることやら…」

オリキャラ紹介？

「あらかわまもる
荒川護」

年齢 15歳

身長 169cm 体重 43kg 髪は赤みがかった茶色で
少し長めで落ち着いた感じの髪型（KHのソラみたいな）

中学二年生。幼いころ両親を事故で亡くし、祖父に育てられたが、その祖父も寿命で亡くした。さ祖父の遺言で、学園都市にやって来た。

祖父に、太極拳、柔道等の体術を教え込まれておりかなりの使い手。彼の能力と併用すれば並みの相手ではどうにもならない強さを発揮する。

グラビティマスター
『重力操作』

護が持つ超能力。地球上に存在する重力を操ることができる。その用途は様々で、重力の負荷を増やしたり減らす事は軽々で行い、応用すること、重力の剣や、重力の弾丸などを作り出すことができる。護の得意とする技は、重力を圧縮した球を重力の力で放つ『重力砲』イテイカノン

オリキャラ紹介？（後書き）

このキャラは後日書く予定の超電磁砲よりの物語の主人公にするつもりです。

第八話（前書き）

今回は神代は出てきません

第八話

皆さん、はじめまして。僕は「荒川護」といいます。

早速ですが僕はかなり困ってます。なにに困ってるって？それは…

「道に迷った…」

と言うわけです。学園都市にいるんだから友達ぐらいいるだろうって？僕は数日前ここに引っ越してきたから友達も知り合もないんだよ…。

「仕方ない…。誰かに聞くな…」

僕は近くを歩いていた高校生ぐらいの人にあいさつを試してみた。

「すみません」

「!?!、なんだい？」

その人はいきなり声をかけた僕にびっくりしていた。でも、体から

出てる空気で何らかの武術をやっているのはわかった。僕はそれなりに体術を修得しているからわかる。この人は強い。」

「すみません。道に迷ってしまっただけ……」

「道に迷った？どこに行きたいんだ？」

「柵川中学です。僕、今日、外から引っ越して来たので……」

柵川中学……僕が転校する予定の中学だ。

「柵川中学なら確か、この道をまっすぐ行けばわかると思うよ」

この人は親切だな……。とりあえず、目的地までの道がわかった。

「まっすぐですね。わかりました、ありがとうございました」

「いや、困ってる人を助けるのは当たり前だからさ。気をつけて行くんだぞ」

男子生徒はそう言って去っていった。

「時間に余裕を持たせた方がいいかな…」

僕も教えてもらった道を進む。

「ちょっと！止めてください！！」

ん？なんだ？

「いいじゃんかよ。俺らとちよつと遊ぶだけだつて」

あれから、15分ぐらい歩いたかな？ そうしたら今の会話が聞こえてきた。どうやら不良が3人グルで女子中学生に詰め寄っていた。

「まあ、いつ帰れるかはわからないけどな！」

不良の一人がそう言うと、他の2人がゲラゲラと品のない笑いをしていた。

「これは助けないとね」

ここで助けなきゃ、男が廃るよね、じいちゃん！

「おい！ あんたら！」

思っただけで実行。これが僕のポリシーだ。

「「「ああん？」」」

3人は同じ凄みかたをした。全然怖くないけど…。

「女子に3人で詰め寄るなんて情けないな。それでも男かよ？」

そう言いながら、僕は女子学生の前に入る。

「なんだと!？」

「もう一度言ってみろ！」

（ここは僕が押さえるから、君は早く助けを呼んできてくれないかな？）

僕は不良どもの言葉をスルーして女子に話しかける。

（わ、わかりました。）

そう言うと女の子は走り出した。

「待ちやがれ！」

不良が追いかけてきたので、僕は彼らの前に立ちふさがった。

「ここを通りたければ、僕を倒してからにしてください」

「てめえ……。どうなるかわかってんだろうな……？」

「ボコボコにされますね」

ここは挑発しとこうかな？

「だったらそこを……貴方たちがね」……、ナメテンのか!？」

早くもキレた不良の一人が僕に殴りかかってくる。切れるの早いな……。それに……。

「グエ……！」

そこまで早くない……。

僕は殴りかかってきた不良を背負い投げの要領で投げ飛ばし、鳩尾に肘を叩き込む。

「よこチン！」

よこチン？変なアダ名…。と言うか汚いな…。

2人は同時に襲いかかってくるが、僕は相手を拳を受け流す。

「この野郎！」

シビレを切らした一人が突出して殴りかかってくるが僕は素早く懐に入り込み、鳩尾に拳を叩き込む。

「くそ！こいつ！！」

最後の一人が自棄になって走ってくるが僕は落ち着いてジャブジャブジャブと体に拳を叩き込み…

「ストレート！」

顔面にストレートの拳を叩き込み終わらせた。

「ふう…。終わったか「そこまです！」…へっ！？」

僕はいつの間にか倒されていた。なぜ？ Why?

「風紀委員ですわ。貴方を暴行の現行犯で逮捕しますの！」
ジャッジメント

はあ！？ 暴行！？ 冗談じゃない！

「せいやー！！」

「ちょー！！？」

僕は押さえつけていた風紀委員ジャッジメントを投げ飛ばし、すぐさま逃げる！！

「待ちなさい！」

冗談じゃない！ 引っ越し早々逮捕だなんて！

僕は大通りに出て走る。ちなみに50m、5.6秒だ。追いつかれる訳が…、なにー！！？

「嘘お！？」

なぜか僕の前に、さっきの風紀委員^{ジャッジメント}がいた。何で!?

「クッ！」

僕はすぐさま方向を変え、コンビニの方に向かう。

「てい！」

そして、コンビニの屋根に向かって跳ぶ。

「ここまで来れば…!?!」

また組倒された…。地味に痛いんだけど…。

「余り手間をかけさせないで下さいまし」

「だーから！僕は暴行なんてしてない！！」

「なら、あの殿方たちはなんで倒れていたのですか？」

「……………」

僕は何を言っても聞かないだろうなと思いながら黙っていた…。

「何を黙っていますの？早く言わないと…」

——プルルッ！プルルッ！

ん？携帯の呼び出し音？

「あのお…、携帯鳴ってます、よ…？」

「誰ですか？こんな時に…？」

ブツブツ言いながらも携帯に出る風紀委員
ジャッジメント

『あ、白井さん！？やっと出た！』

「初春…？なんですか？今、先ほどの暴行事件の犯人を確保したところですよ。用件があるなら早く…『用件大有りですよ！』…初春？」

——ん？なんだ？

『その人は犯人じゃないんです！』

「え？」

『だから！その人は犯人確保に協力してくれたんですよ！』

「……………本当ですよ？」

「何が…？」

「貴方が犯人の確保に協力したというのは…」

「だから、さっきからそう言ってたよ…」

『とりあえず、事情聴取のために連れてきて下さい』

「わかりました」

ジャッジメント
風紀委員は携帯を切ると、僕を解放した。

「まずは謝罪しますわ。すみませんでした」

「別にいいよ。そっちも仕事だったんだろ？それじゃ僕はこれで」

僕が歩き出そうとしたら風紀委員は僕の腕を掴んでいた。
ジャッジメント

「どこに行くのですか？」

「えっ…？どこって、これから用事が…その用事は後回しですわ。
事情聴取のために風紀委員第117支部に来てもらいますわ」…え
っ？」

そのまま僕は飛ばされた

第八話（後書き）

次回も神代はあまり出てきません

第九話（前書き）

今回も護視点の話です。

第九話

「あれ？」

ここどこだ？

その後、僕はあの風紀委員ジャツジメントに腕を掴まれて…、確か「…」その用事は後回しですわ。事情聴取のために風紀委員第117支部に來てもらいますわ」って言われたから…。

「何をボーっとしておりますの？早く來てくださいまし」

「あ、ああ」

僕は風紀委員ジャツジメントに促されて中に入る。

「あ、白井さん。やっと帰って來たんですね」

うわぁ、頭の上が花でいっぱいだ…。

「全く、なんでもっと早くこの方が犯人ではないと言ってくれなかつたんですの？」

「む…！白井さんが通報を聞いたとたんに飛び出して、そのままこっちの情報を聞かずに勝手に確保しちゃったんじゃないですか！」

何やら込み入った話みたいだ…。僕はどうすればいいのかな？

「そ、そうでしたかしら…？」

「とにかく、犯人は捕まったから良しとしますけどね」

「あのー、僕この後用事があるので出来れば早く終わらせたいんですけど…」

「あ、もうしわけありません。私、わたくしここ風紀委員第177支部に所属しております白井黒子と申します」

白井さんがお辞儀をして自己紹介をしてきたので僕もつられてお辞儀をする。

「で…、こちらが私のパートナーの…」

「初春飾利です。よろしくお願いしますね」

「僕は、荒川護です」

「荒川さんですね。それではこれから事件の事情聴取を行いたいと思います…。よろしいですか？」

「断ってもやるんでしょ？」

「あら、よくわかりで」

「やっぱり…」

今日来たばかりだからまだ食糧も買っていないから学校からの帰りに食糧を買っておきたかったんだけどなあ…

「それでは、なぜあのようなことになったのですか？」

「あのようなことって？」

「不良をボコボコにしていた事ですわ」

「ああ、あれね…、あの人たちが女子中学生に絡んでいたから注意したら殴りかかってきたからボコボコにした」

「まだ隠していることがありますわね」

「なっ！？なぜばれた！？」

「顔に出ていますわよ…」

「なんでそう思うのかな…？」

「目が泳いでいますもの」

なっ！？まだ会って数分の相手に僕が嘘をつけないと言う事がばれただとう！？

「声に出してはっきりと肯定しておりますわよ」

「しまった!？」

「さあ、話してくださいな」

「仕方ないなあ…、女の子を逃がした後に僕が挑発しました…」

ああ…、なんか面倒なことになりそう…。

「あ、因みにその時の出来事は監視カメラにバッチリと移ってますから。その挑発したこともとくにわかってましたよ？」

「さっきのやり取りいらなくねえ!？」

「まあ、あの喧嘩の原因の一端を持っていたということになりますわね」

ああ、僕の中学生時代の青春は少年院から始まるのか…。トホホ…。

僕がガツクリと落ち込んでいると初春さんが希望の光を照らしてくれた。

「普通ならそこで拘束されますが、あなたが助けた人の証言もありますから、多分反省文だけで済むと思いますよ？」

「マジで！？あ、でも…」

そうだ、反省文となると…

「？どこかしましたか？」

「僕、作文苦手なんだよなあ…」

「そんな事でしたの…」

白井さんがあきれた声を出した。

「仕方ありませんね…、今回は…「黒子ー！遊びに来たわよー！！」
…、お姉さま、能力でロックを解除するのはあれほど言うておりま
すのに…」

「まあ、いいじゃない。あら？お客さん？」

「ええ、女子中学生に絡んでいた不良を確保してくれた荒川護さんですわ」

「ああ、それ知ってる！なんかちよつとした噂になってたわよ？
レポーターの風紀委員ジャッジメントから追いかけて逃げた時間の最高記録になった男がいるって」

「そんなことになってたのか…」

「私は御坂美琴」

彼女は僕を見ると自己紹介をしてくれた

「御坂？」

何だろう？聞いたことがある…

「ああ、そういえば護さんはご存じなかったですわね。この方こそ、我が常磐台中学の誇るエース、『超電磁砲^{レールガン}』こと御坂美琴お姉さまですわ」

「ちょっと黒子…」

「へえ、すごいんだ」

僕が驚いた声を出すと、御坂さんがうれしそうな声で

「え、そ、そうでしょ！すごいだよ！」

えらく威張ってきた。何だろう、いらつときた。

「それで？あんたは？」

「へ？何が？」

名前はさっき白井さんが言ってくれた。後は当てはまる事がないので僕は首を傾げた。

「何がって、あんたの能力よ！ここに来たからには何かチカラが出たんでしょ？それも不良どもを一蹴にして、なおかつ黒子からしばらく逃げたんでしょ？」

「あ…、実はまだ能力開発受けてないんだ…」

「え？じゃあどうやって不良どもをやっつけて、黒子から逃げたの？」

「素手で倒して走って逃げた」

「冗談でしょ？」

本当です。頼むからその顔やメテ、めっちゃ怖い…。

「本当ですよ、御坂さん」

「初春さん？」

初春さんが助け舟を出してくれた。ありがとう助かったよ…。

「映像見ます？ バッチリ移ってますよ？」

「見せて見せて」

初春がパソコンを使って監視カメラの映像を再生する。

うん。自分の活躍を見ておくのもいいかな？

すると僕だけでなく、白井さんも見ていた。

.....5時間後.....

そのあとはひどい事になった……。あの映像の中での僕の戦いは相手が弱いのもあったが30秒で終わってしまい、白井は何度もその映像を見て、その間僕は御坂の奴は勝負しろだって五月蠅くなってしまう。えっ？なんで御坂にはさんを付けてないのかって？あんなに勝負勝負って言うてくる奴にさん付けは不要だと思ったからだよ。そのあとは白井が（さん付けを辞めた理由は言いたくない）風紀委員ジャッジメンに入れ入れて五月蠅くなったからだ。

あ、なんだかんだで作文はなしになり、また連絡するかもってその場にいた3人に携帯のアドレスを交換した。

その後学校に行くことができた僕は、能力開発を受けることができた。レベルの判定はまだしていないから分からないけど、とりあえ

「グラビティマスター」
ず『重力操作』と言う能力らしい。今は学生寮に向かって慣れない
街の夜道を歩いていた。

「ん？」

僕は周りを見回す。

「人がいない？」

何か変だ……。今の時間は……。午後八時……。夜にはなっているが人が
一人もいないなんておかしい……。僕は改めて周りを見回す。

すると、

———ドオオオオオオン！！

近くの路地裏で巨大な炎が燃え上がっていた。

「なんだ！？また不良か！？」

僕は現場に走り出し、曲がり角を曲がると…

「ぎゃ！？」

誰かとぶつかった。え？シスター…？

「あ、えっと大b…「逃げて!!」…はあ!？」

少女が叫ぶと同時に僕は彼女を抱きあげ横に跳ぶとさっきまで僕がいた場所が炎に包まれていた。

「な、なんだ…!？」

「おや？人払いのルーンを刻んでいたんだけどね…。昨日と言いい日と言いい、イレギュラーが多いねこの街は。」

声のした方を見ると赤い髪をした2mを超す高さの神父がいた。いや、神父って言うていいのかな？世界中の神父に失礼じゃないかな？というか神父がタバコ吸ってるよ…。てかあの神父、暗闇だからよくわからないけど多分僕よりも年下のような気がする…。タバコは20歳になってからだぞ!!このニコチン神父め!!

「失礼なのは君だよ…。よく初対面の人に向かってそこまで言えるね」

「な、なんで！？まさか心も読めるのかこのニコ神は！？」

「いや、声に出していたからね。それから、略すのはやめてくれな
いか？腹が立つ」

「逃げて！！あいつは私を狙ってるの！！」

な、何い！？

「あんた、ニコチン中毒でだけでなくロリコンだったのか！！」

「な、ち、違う！！僕はロリコンじゃない！！」

見苦しいな…。

「だまれ、このロリコン神父」

「な、君はもう消すしかないようだね…」

さあ、どうするかな？なんかやばそうだけど…。

「イッツ ア ピーチ…？」

「灰は灰に、塵は塵に。吸血殺しの…！？」

——ドガッ！バキッ！ガスッ！！

何だ！？暗闇でよく見えない…。何かがあこのロリコン神父を打倒したのは分かるけど…。

「インデックス!!」

「かずき!!」

そう言うとシスターは、暗闇から出てきた人に向かって走って行った。

て言うか、あの人は…

「大丈夫か？」

「うん! あの人途中であつてくれなかつたら危なかつたかも?」

「そうか…、て、確か昼間の…」

昼間僕に道を教えてくれた人だった。

第九話（後書き）

今回は神代が暗闇の中でステイルをボコボコにしてみました。

うーん。あとがきって書くの難しい…

第十話（前書き）

今回はついに、アイツの出番です！

第十話

「ふう…」

神代はたった今倒した魔術師を見下ろす。

「悪いがインデックスをやらせる訳にはいかないんでな…」

そう呟き、神代はインデックスを見て、

「インデックス!!」

「かずき!!」

インデックスは神代の名前を呼ぶと、神代のところにやって来た。

「大丈夫だったか？」

「うん、あの人が途中で来てくれなかったら危なかったかも？」

「そうか…、て、確か昼間の…」

神代がインデックスを庇っていた人物を見て、驚きの声を上げた。

「あ、昼間ありがとうございました」

少年は律儀に昼間のお礼をしてきた。

「いわ、こっちこそ助かったよ。インデックスに何かあったら、俺が怒られるからな…」

「ねえ、二人は知り合いだったの？会話についていけないんだけど？」

インデックスが待ちきれなくなり、二人の会話に割り込んできた。

「いや、昼間に道を聞かれたから、教えてやったって関係だ」

そう返事しながら、神代は少年を見る。

——それなりに体術の心得があるみたいだな…。頼んでみるかな。

ある程度武術の心得があれば、相手の力量を測ることができる。神代はそのレベルにはとづくに達していた。

「なあ、君…。あ、僕は荒川護です。護って呼んでください」…少し頼み後とをしてもいいかな？」

「何ですか？まあ、大方予想がつきますけど…」

「なら話が早い。インデックスを安全な場所に送って欲しい」

神代は荒川に頼み込む。

「わかりました。あ、連絡は…」

「そうだな…。これがアドレスだ。それじゃ、頼んだぞ。インデックス、気を付けろよ」

神代は携帯のアドレスを書いた紙を荒川に渡し、走り出す。

「かずきも気をつけてねー！」

その言葉を背中に受けながら、神代は闇の中に向かっていく。

「…、うるっせえんだよ！ど素人が！！」

——なんだ！？今の声は、神裂の声か！？

神代は夜の街を滑っていた。コンディショニングコントロール『状態変化』で、路面を凍らせ、スケートをするように滑って、上条のもとに急いでいた。

「くそっ！！」

神代が二人を見つけた時には、神裂が上条の腹に日本刀——七天七刀の鞘を空中から叩き込んでいたところだった。

神代はすぐさま、周囲の金属を変化させ、極細の鋼鉄製のワイヤーを作りだし、上条の身体ををワイヤーで絡めとる。

「また、あなたですか…」

——なんだ！？この間と雰囲気が違う！！

今の神裂は神代を怯ませる程の殺気を放っていた。

「お前…、なんで当麻をこんなに痛めつけたんだ！！」

上条は身体中を血だらけにして気絶していた。特に右手が酷い。あのワイヤーに切り裂かれていた。指が切り落とされていないのが、不思議に思える。

「お前たちがなんで、インデックスを狙うのかは知らない。だけど、あいつはなんで記憶を失ってんだ！？考えるまでもないな、お前らがあいつを追い回したからだろうが！！なのにまだ、あいつを追い回すのか！？それなら：「インデックスが記憶を消さないと死んでしまうのなら？」：何だって？」

「彼女は頭の中に10万3000冊の魔導書を記憶しています。それも、一つ一つが目を通す事だけで精神を壊す程の物を」

「……………」

神裂の話を神代は黙って聞いていた。

「完全記憶能力と言う言葉を知っていますか？」

「…、確か、見たもの聞いたものを全て記憶するってやつだったか？」

「そうです。彼女はその能力のせいで、記憶が彼女の脳を圧迫し彼女を死に至らしめます。彼女を死なせないために私たちは彼女の記憶を消してきたのですよ…」

「な、んだって…！？死なせないために記憶を消してきた…？」

「そうしないと彼女はその命さえも失ってしまいますから…」「ふざっけんな！！お前らは自分で記憶を消さないであいつを助けようとしなかったのか！？」

「やりましたよ！！あなたが言ったように、私たちは彼女の記憶を消さないで助けようとしてました！！でも、何も変わらなかった…」

「お前らの行いはただの逃げだ！！助ける手段を探し、それを試し、ダメでも足掻いて、もがいて、それでも諦めずにやったのか！？」「そろそろ、時間になります。あなたを殺してでも、彼女を回収します」

神裂は七天七刀を抜いた。神代はとっさの事で反応できず、上条をそのワイヤーの攻撃範囲外に投げ飛ばす。

「がっ！？」

神代の身体はワイヤーで切り裂かれ、腕、脚、額、腹からは血が出てきていた。

「彼女にこれ以上関わらないでください。断れば命はありません」

神裂は膝を着いている神代に向かって七天天七刀を向ける。

「諦めてたまるかよ…、俺は最後まで諦めねえぞ!!」

神代は手にしたワイヤーで七天天七刀を絡めとり、動かさないようにして、神裂に殴りかかる。

「がああ!?!」

神裂は七天天七刀を手放し、神代の腹に蹴りを入れる。聖人の手加減なしの蹴りを食らった神代は建物の壁に叩きつけられ気を失ってしまう。

「またここか…」

神代は以前来た、真っ白な部屋にいた。そこにはやはりもう一人の神代がいた。

「で、今度はなんのようだ？」

『いや、なに。これからお前の身体を借りるからな、それを言いにきた』

「借りるって、どうやってだよ？」

『いや、ただ単にお前が許可をくれたら変われるんだよ』

「と言うことは、ここはやっぱり…」

もう一人の神代はニヤリと笑うと、答えた。

『そうだ、ここはお前の意識の中で俺はお前のなんて言うかな？ 簡単に言うとお前の負の感情の塊？ みたいな者だな』

「で、お前は俺の身体を使ってどうするんだ？」

『お前の意識は今、ここにある、つまり、今気絶しているわけだ。そして、神裂がお前を殺そうとしている。俺はあいつからお前の身体を逃がすだけだ』

「そうか…、なら当麻も一緒に頼む。あいつを死なせる訳にはいいかない」

『わかってるよ。じゃあ、いって訳だな？』

「ああ、後は頼んだぞ」

『オーライ』

もう一人の神代はそう言って消えて行った。
神代はもう一人の神代が消えると同時に気を失った。

「あなたは殺したくなかったのですが…」

神裂は壁に叩きつけられ、気を失った神代に向かって七天七刀を構える。

「こちらにも、譲れないものがあるのです！」

神裂が七天七刀を神代に振り下ろす直前、神代の腕が動き、ワイヤーで七天七刀を受け止めていた。

「なっ！？あの攻撃でまだ気を保って…！」

『なかなかいいものだ…。自由に身体を動かせるってのは？』

傷だらけの身体を立たせる神代。その神代を見て、神裂は疑問を抱いた。

「あなたは、神代和樹ではないのですか…」

『ああ…。違うな。オレはあいつであってあいつじゃない。強い
て言うなら…』

もう一人の神代は自分の名前を告げる

『^{ガーディアン}守護者、^{もりと}守人とても名乗っておくか』

もう一人な神代―守人―はワイヤーを刀に変化させ、神裂に向ける。

『宿主に言われたから倒しはしないが、少しは楽しもうぜ？魔術師、
神裂火織？』

第十話（後書き）

第十話をお送りしました。

『って、オオイ!!』

おや、これはこれは。守人君じゃないか。どうしたんだい？ここは後書きだから君の出番ないよ？

『うるせえ!! なんだこの終わり方は!!？オレの活躍は次回にお願いか!!？』

ああ、君の出番は次回もないよ？

『はあ!!？なんで!!？』

だって基本、この物語は和樹が主軸だからね？

『ええー!! そんなー!!』

大丈夫大丈夫。君の出番もちゃんと作るからさ。いつになるかはわ

からないけど…。

『そんなー！！！！！！』

字数制限に引っ掛かりそうだから今回はここまで。感想等、お待ちしております！

第十一話（前書き）

今回はかなり短いです

第十一話

「うっ…」

神代は全身の痛みに叩き起こされた。

「ここは………、小萌先生ん家か…。」

身体を起き上がらせようとすると、腕に痛みが走った。

「そうか…、俺、神裂に斬られて、そのままアイツに身体を渡したんだったな…。」

横を見ると、上条は包帯で手当てをしてもらい、布団で寝ていた。インデックスは上条の布団に被さっていた。

——プルルッ！プルルッ！

神代の携帯が机の上でなっている。小萌は今はいないようだ。神代は誰からだど、愚痴を言いながら、部屋の外に出た。

「はい、もしもし？」

『あ！護です！身体の方は大丈夫ですか！？』

電話の相手は荒川だった。

「ああ。ところで、俺はどうしていたんだ？」

『あの後、インデックスと一緒にアパートに来たら、あなたと、もう一人がアパートの前で血だらけで倒れていたんですよ！それで、小萌先生と僕とで手当てしたんです！！三日間ずっと眠っていたんですよ！！』

「三日間も！？」

神代は携帯の時計を確認すると時刻は朝の5時を示していた。

『とにかく、しばらくは安静にしておいてください！』

そう言って、荒川は携帯を切った。

「三日間も寝てたのかよ…」

神代は、三日前の出来事を思い出そうとするが、もう一人の自分に身体を渡してからの事が思い出せなかった。

——プルッ！プルッ！

また、神代の携帯が鳴り出す。そこに表示された番号は神代が知らないものだった。

「この電話番号は現在使われておりません。電話番号を確認し直して、おかけください」

『無駄な時間をとってる暇はないのですが…』

「なんでお前が俺の携帯の電話番号しってんだ…？」

かけてきたのは神裂火織だった。神代は電話番号等は教えた記憶はないのだが…。

「それで？なんのようだ？こっちはお前に切り刻まれて身体中激痛が走ってんだ。用件がないなら切るぞ」

『あなたに話していなかった事があるので、電話しました』

「話していなかった事…？」

『インデックスの記憶の件です。彼女の記憶の消去を今夜行います』

「なに！？」

『それだけです。後々、そちらに伺います』

それだけ言うと神裂は電話を一方的に切った。

「おい！？待てよ！クソッ！！」

神代は携帯が壊れそうな程の力で携帯を握りしめ、呟く。

「絶対に諦めねえさ。俺たちは諦めが悪いんだよ…」

神代は決意をした目をして、部屋に戻る。別に外にいても良かったのだが、部屋の中から上条の悲鳴が聞こえて来たような気がしたから…。

第十一話（後書き）

かなり短かったのであまり書けませんでした……。次回で第一巻の内容を終わらせられたらいいなあ……

第十二話

その後、神代は部屋の中での出来事を見て腹の傷口が裂けない程度に笑っていた。上条や、インデックスからしたら笑い事じゃないのだがという視線を向けられて…

「とにかく、今は傷を治すことが先だな…」

上条がそう呟く。その言葉に神代も続く。

「確かにこの傷だらけの身体じゃあ、はつきり言ってそこらへんの不良にも勝てないかもな…」

二人の言葉にインデックスが反応し、俯きながら二人に言う。

「ごめんね、私のせいで二人に大怪我させちゃって…、私がいなかったら二人ともこんな怪我しなくて済んだのに…」

「何言ってるんだよ…」

神代の否定する言葉にインデックスは顔を上げる。

「お前は今まで一人で逃げて来たんだろ？なら、少しは他人を頼れ。そりゃあ俺たちみたいに怪我するまで付き合うような奴はあまりいないだろうけど、それでもお前を助けようとしている人はたくさんいるんだぜ？やり方は違ってもお前を知っている人間はお前の事を思っ
て行動しているんだからな」

「……………」

神代の言葉に絶句するインデックス。

「どうした？」

「それ、とうまも似たような事言ってた」

「マジ？」

「うん」

またもや爆笑していた三人はノックでドアの方を見た。

「こもえかな？」

「つかインデックス。お前、年上を呼び捨てにすんなよな」

あれー？うちの前で何やってるんですかー？という声がドアの向こうから聞こえてきた。じゃあ誰なんだと神代と上条は首を傾げていると、

「神代ちゃん、上条ちゃん、何だか知らないけどお客さんみたいですよー」

ガチャンとドアが開き、ビクンと上条の肩が震え、神代は付近にあったスプーンをとっさにナイフに状態変化させた。

小萌先生の後ろには、見慣れた魔術師が、二人立っていた。

二人の魔術師、ステイルⅡマグヌスと神裂火織はインデックスが普通に立っているのを見て少し安堵し、神裂に至っては神代を見るとすこし警戒したような顔をした。

神代の頭にちらっと疑問が浮かんだ。なぜ今、ここに来る必要がある？ いや、そもそもインデックスの記憶を消すなら、神代と上条を倒した後にインデックスを追えばよかっただけの話だ。荒川だけでは、神裂を止めることはできなかったはずだ。今日治療するにしても、インデックスを野放しにしておく理由がない。万が一にインデックスがこの街から出て行った場合を防ぐためにどこかの建物に監禁でもしておけばいいだろう。

神代と上条を見つめて、ステイルが口を開いた。

「ふうん。その体じゃ、簡単に逃げ出すことはできないみたいだね」

「何…?」

神代はステイルの言葉によって彼らの意図を読み取った。つまり、怪我をして動けない自分たちをインデックスの足かせにするためにわざと逃がしたということに。実際そうだった。ステイルは神代がボコボコにし、神裂との戦いのとき、神代は気を失っており知らないことだが、守人が戦い、上条をかついで逃げ切れたのも彼らが最初から神代達を利用しようとしていたからだ。インデックスはこれまで、一年間彼らの追撃を免れていたのだ。タイムリミットまで残り少ない今、そんな事になれば取り返しのつかなくなる事になる。そうなる前に手を打ったという訳だ。

「帰って、魔術師」

そして、インデックスはそんな彼らのために魔術師の前に立ちふさがった。両腕を広げ、ここから先には通さないと感じた感じに…。それは魔術師たちの意図したように…。神代、上条、といった足枷をはめられたインデックスは逃げることをやめていた。

「……………」

ビクンとステイルと神裂の身体が震えた。一体どんな感じなのだろうと神代は思う。自分たちが守ろうとしている相手に拒絶されるということは…。

「やめろ、インデックス！そいつらは敵じゃ…痛っ」

「帰って!!」

その時二人は一瞬、辛そうな笑顔をした後に、ガチンとスイッチの入ったように瞳の色が変わった。インデックスを思う仲間としての視線から、凍てついた魔術師の瞳に…。

「リミットまで後一二時間と三十八分。『その時』まで逃げ出さないかどうか、ちょっと「足枷の効果を見に来たんだろう？」…、そうなんだけど、僕のセリフを取らないでほしいね」

ステイルの言葉の間に割り込みステイルのセリフを取った神代は面白くないと言った顔をした。

「とりあえず、そのオモチャを取られなくなかったら、もう逃亡の可能性は捨てたほうがいい。いいね？」

そのセリフこそ酷いものだったが、演技だという事が神代にはよくわかった。その心は仲間を思いやる気持ち、仲間であるインデックスを救いたいという気持ち。そのセリフから神代は彼らの覚悟の大きさを知った。

その後、彼は何も言わずに去って行った。

夜になり、神代は部屋の外にいた。夏とは言え、まだ七月。夜は少し冷え、神裂に切られた傷には悪く、鈍い痛みが少しだが彼を襲っていた。部屋の中には上条と眠ってしまったインデックスしかない。小萌先生は銭湯に向かって歩いて行った。

（俺たちはあいつらみたいな覚悟があったのだろうか…。俺たちの

覚悟なんか、あいつらのものに比べたらなに等しいものだったんじゃないか…？)

———プルッ！プルッ！

神代の携帯電話の着信音が鳴り響く。呼び出し人は「神裂火織」となっていた。

「なんだ？」

『あの少年に代わってもらっても宜しいですか？』

あの少年、と言われて神代は誰のことかすぐに分かった。

「ちょっと待ってろ…」

神代は部屋の中に入り、上条に携帯を渡す。

「誰からだ？」

「神裂からだ…」

神代が神裂の名前を出すと、上条が携帯を急いで受け取る。

「俺だ…」

そこから先は、上条と神裂との話になるだろうと思い、神代は再び部屋の外に出た。

.....数分後.....

話が終わったのか、上条が、神代を部屋の中に入れた。

「やるのか？」

神代が何かを決めた時の目をした上条を見て尋ねる。

「ああ。もう時間がない。何が何でも脳医学関係の所に連れていくために、小萌先生の携帯の電話番号を探しだす。そのためには、猫

の手も借りたいんだ。頼めるか？」

「ああ…。もちろんだ。」

それからしばらく二人は小萌先生の部屋の中を探しまわった。すると、あるレポートの山の中から一枚の紙が出てきた。神代はそれが目につき拾うと、それが希望の光の一つになると感じた。

「当麻!!」

「見つけたか!？」

神代が見つけたのは、携帯の通話料金だった。丁寧に11桁の電話番号が書かれていた。

上条は神代の電話で、急いで小萌先生に電話する。神代は一つの変に気が付いていた。一つはインデックスの様子。もう一つはあ、カンカン、とアパートの階段を上る二つの足音だった。

「いん、でつくす…?」

上条もインデックスの異変に気がついたようだった。彼女はまるで病人のように汗を流して、眠っていた。

ドンッ!とアパートのドアが蹴破られ、外から月の青い光が差し込んでくる。それは二人にとって時間切れ（タイムアップ）の知らせだった……………。

第十二話（後書き）

第一巻の完結は次回になります。お楽しみに！

第十三話

二人の魔術師は、ドアを蹴破り土足のまま入ってきた。ステイルは上条を邪魔だと言わんばかりに突き飛ばす。それほど強くはない力で押されたのにもかかわらず、上条は踏ん張る事も出来ずにそのまま畳に尻もちをついてしまう。

「……………」

上条は何かを言おうとしたが、その口から言葉は出なかった。

ステイルは、上条の事など気にもせず辛そうに汗をかき、眠っているインデックスを見つめていた。彼女を見つめるその背中では震えていた。彼の愛する者が目の前で傷つけられた『人間』の怒りのままに。

「クロウリーの書を参照。^{ムーンチルドレン} 天使の捕縛法を応用し、妖精の召喚・捕獲・使役の連鎖を作る」

その言葉を紡ぐ彼の顔は、たった一人の少女を救うためだけに人間を辞めた魔術師の顔だった。

「—————神裂、手伝え。この子の記憶を殺しつくすぞ」

その言葉は上条の胸の一番もろい部分に突き刺さった。神代は壁際に立ち、目をつむっていたが、その手のひらは爪が皮膚を食い破り、血が流れ出していた…。その様子を見て神裂は俯いた。彼らもまた、この子を救いたかったのだと胸に思いながら…。

ステイルは術式を発動するための準備を行っていた。そこに上条が、

「ま、てよ…、待てよ。待ってくれ！もう少しなんだ！あと少しで分かるんだ！この学園都市には230万人もの学生がいる、それらサイコメトリーを統べる機関だって1000以上ある。読心能力、洗脳能力、マリオネット、念話テレキ能力に思念使い（マテリアライズ）！『心を操る能力者』も『心を開発する研究機関』もゴロゴロ転がってんだ、そういう所を頼って行けば、最悪の魔術こんなほうほうなんかに頼らなくても済むかもしれねーんだよ！」

「……………」

ステイルは何も告げない。だが、上条はお構いなしに続ける。

「お前たちだってこんな方法とりかねーんだろ？心の中では他の方法はありませんかってお祈りしてんだろ？だったらもう少しだけ待ってくれ、俺が必ず誰もが笑って誰もが幸福な結末を探して見せるから！だから……っ！！」

ステイルは一言も告げない。上条はそれ以上は何も言えなかった。

「言いたいことはそれだけか、出来損ないの独善者が」

ルーンの魔術師―ステイルⅡマグヌスが放った言葉はそれだった。

「見ろ!!」

ステイルは上条の髪をつかみインデックスの方に上条の顔を向けさせる。

「君は、君達はこの子の前で同じ台詞が言えるのか?こんな死人の1秒前みたいな人間に!激痛で目も開けられない病人に!ちよつと試したい事があるからそのまま待ってろなんて言えるのか!!」

ステイルの言葉は震えていたが、それでも今の神代と上条の心にダ

メージを与える事は出来た。

「だったら、君達はもう人間じゃない！今この子を前に、試した事のない薬を打って顔も名前も知らない医者にこの子の身体を好き勝手にいじらせ、薬漬けにするのを良しとするんだなんて、そんなものは人間じゃない！！」

ステイルの言葉を受け、神代は少しずつだが、冷静に物事を考えることができてきた。インデックスをむしんでいるのは魔術だ。つまり、それは異能の力…。インデックスの脳に働きかけるためには脳に一番近い場所にその術式はあるはず…。それもふだんは他人に見せないようなところに…。

「答えろ、能力者共。君達はまだ人間か、それとも、人間の皮を被ったバケモノなのか！？」

「……………」

上条は答えない…。いや、答えられなかった。

するとステイルは懷から何かを取り出した。

「それは？」

「……………これはあの子の記憶を消すためのに必要な道具だ。もちろん魔術の一品だ。君の右手が触れれば力を失うはずだ。」

「なあ。魔術師。」

神代が、ステイルに話し掛ける。

「何だ？」

「すこし、こいつらを二人にしてやってくれないか…?」

神代は笑っていた…。それは諦めた者がする笑顔だった。その顔を見て、神裂は

「儀式を行うまでまだ時間がありますね…」

「神裂、何を…!」

ステイルは神裂の言葉に驚く。

「……………私たちが彼女の記憶を始めて消すと誓った時に、私たちは一晩中あの子のそばで泣きじゃぐっていました。そうでしょう？ステイル」

「……………ッ！10分間だけだ！！良いな！！」

そう言ってステイルはアパートのドアに向かっていった。神裂はなにも言わずにステイルに続いて外に出たがその目はとてもつらそうに笑っていた…。最期に神代が上条に向かって視線を送り、出て行った。

「神代…。」

長い付き合いの二人だからこそ分かる。神代の視線は、希望の光だと上条は確信した。

「あなたはよかったのですか？最後にあの子に何か言ってやらなくて」

外に出た神裂はついてきた神代に尋ねた。

「俺はこういう最後の別れってのが嫌いだね…」

「ですが、次に彼女が目覚めたときにはあなたの事は覚えていませんよ？」

「そうだろうなあ…、あいつが気がつかなきゃ俺はそのチャンスはもう手に入らないんだろうなあ」

「けどな、最後なんて言うなよ。抗い続けてそれでも駄目な時に取っておくもんだよそりゃ」

神代の言葉にステイルは不快感をあらわにして言う。

「どういう事だかわからないな」

「簡単な事さ」

一呼吸おいて神代は言葉を紡ぐ。

「世の中、諦めの悪い奴が結局は勝つて事だよ」

その直後、——ドントッ!!という音が部屋の中から聞こえた。

「今回の主人公^{ヒーロー}の座は譲ってやるよ、当麻」

そう呟き、中に入る神代。二人の魔術師も神代の後に入ってくる。

中ではインデックスから放たれている光線を上条の右腕が防いでいるところだった。しかし、その均衡もすぐに崩されようとしていた。

「当麻!どけ!!」

神代はカメハ○波の構えをする。するとその両腕の間に光のエネルギーがたまっていくのが分かる。そして…

神裂が、神代と戦っていた時から考えられないほど狼狽していた。

「……………ど、『ドラゴンプレス竜王の殺息』って、なんで彼女が魔術を使っているんですか!?!」

神代は振り返らず、上条に言う。

「当麻!! 俺がしばらく持たせる!! そいつらを説得しろ!!」

「分かってる!!」

当麻が魔術師に事情を説明しに行ったのを背中越しに感じると、神代は目の前のインデックスに集中し始めた。

「全く、お前がこんな聞かん坊だったとはな…、悪いがお目当ての当麻はちよつと用があるからな…。それまで俺が相手しておいてやるよ!!」

「————『^{セント}聖ジョージの聖域』は侵入者に対し効果が見られませんが。他の術式を併用し、引き続き『首輪』保護のため侵入者の破壊を継続します」

インデックスがそう言うのと、光の柱が倍近くまで太くなり、神代の『荷電粒子砲』を押していく。

「グッ!! まだまだああああ!!」

神代も自分の限界近くまで力を放出するが、それでもインデックスの放つ光の柱に圧倒され始めていた。

「手を伸ばせば届くんだ!! いい加減に始めようぜ、魔術師!」

神代の耳には後ろでの三人の会話が耳に入っていたが、――――
――ブシィィィッ！、神代の右腕の傷が開き、右腕が弾きとば去られ、左腕だけで持ちこたえる事になってしまった。

「グッ！？」

インデックスの光の柱の力は絶大で、神代の足は畳の床を踏み碎き、腹、額、左脚の傷も開きかけていた。

「――――『^{セント}聖ジョージの聖域』の効果認められないため、新たに術式を組み込みます。対象、『神代和樹』に対して最も有効な術式の選出が完了しました。これより、『^{セント}聖ジョージの聖域』と『^{ラグナロク}終末の光』を発動します」

インデックスの放つ光の輝きが一層増し威力が上がり、神代の左腕

を弾き飛ばす！

「しまっ…！」

光の柱が神代に迫り、今にも彼の身体を食い千切ろうとしたとき、

「——————Salvare000!!」

神代は神裂の叫び声を聞いた。それは、初めて二人が戦ったときに聞いた二つ名。あの時は聞きたくなかった言葉だが、今は一番聞きたかった言葉。彼女―神裂火織が『魔術』を使う時に必ず名乗るものだと言った————『魔法名』

神裂が抜いた刀から七本のワイヤー、『七閃』がインデックスの元へ襲いかかり、彼女の足元の畳を切り裂いた。

突然、足場を失ったインデックスは後ろに倒れ込む。それに合わせ、光の柱も上空に向かい天井を軽々と引き裂いた。引き裂かれた天井からはひらひらと光の羽が降りてきていた。

「あれは『ドラゴンプレス竜王の殺息です!! いくら超能力があると言っても一人で張り合おうとしないで!!」

神裂が神代に注意を促す声を上げる。神代は身体に力が入らず、その場に崩れ落ちる。

「当麻!!」

神代は上条に怒鳴るが、上条はその声を聞く前に走り出していた。

しかし、彼がインデックスの元にたどり着く前にインデックスが首を回し光の柱を上条に振りおろす。

「魔女狩りの王！イノケンティウス！！」

しかし、その光の柱が上条に当たる事はなかった。ステイルが呼び出した『魔女狩りの王』イノケンティウスが上条と光の柱の間に両腕を広げ立ち、上条を守っていた。まるで、信者を守る十字架のように…

「急げ、能力者！元々、あの子の制限時間は過ぎている！何かを成し遂げたいなら1秒でも時間稼ぎはするな！」

ステイルのその言葉に上条は頷き、走り出すが、インデックスの周囲には天井から舞い降りてきている何十枚もの光の羽があった。

「! いけません————上!」そのまま行けえ!!」何を!？」

神裂が上条を止めようとするが、何とか立ち上がった神代が叫ぶ。
上条は止まらずにインデックスに近づくが、その頭のすぐ上には光の羽が降りてきていたが、神代が力を振り絞り何とか極細の『荷電粒子』を撃ちだし落としていくがそれも数発で神代は本当に力を使い果たし、膝立ちになる
彼の身体は至るところから血がにじみ出ている。

上条は、インデックスの前に立ち、右手を挙げ、五本の指を思いっきり開く。まるで掌底を浴びせるように…。そして、その右手を振りおろした。

その先にある魔方陣をあつさりと引き裂いた。

「————警、こく。最終……………章。第、零——……………。
『首輪、』致命的な、破壊……………、再生、不可……………消」

インデックスの口から機械的な言葉が消えると同時に魔方陣も消える。

そして…

「当麻……!!」

上条の頭の上に一枚の羽が舞い降りた。

その一枚が頭に触れただけで上条は気を失い、まだ床に倒れている
インデックスの身体に被さるように倒れた。まるで、舞い降りる羽
からインデックスを庇うように………

その夜、上条当麻は死んだ。

第十三話（後書き）

次回はその後の話です。

感想、アドバイスなどお待ちしております。

第十四話（前書き）

今回は短いです。

第十四話

簡単に言うと上条当麻は死んだ。肉体的には生きているが、記憶、思い出を司る脳細胞が死んだのだ。パソコンで言うとハードディスクを焼き切った状態だ。しかし、その事実を知っている者は記憶を失った上条当麻と彼を治療した医者だけだった。そのほかの者は誰も、その真実を知らない。親友の神代も、彼らが救ったインデックスも……………。

神代は全身切り傷だらけで能力の使い過ぎで少しの間、入院することになった。医者の言う所によると、「入院している間は能力の使用は厳禁だよ。少しは脳を休めない」という事だった。

「……………」

魔術師、神裂火織は病院の玄関の前に立っていた。そんな彼女に背後から声をかけた人物がいた。

「そんな所に突っ立てないで、中に入ったらどうだ？」

「!？あなた！確か絶対安静じゃなかったのですか？」

彼女は驚きの声を上げる。彼女の後ろには木にもたれかかり週刊誌のマンガを読んでいる神代がいた。

「ん？ ああ、今日がこれの発売日だから抜け出してきたのさ。ついでにあいつに見舞いの品もな」

そう言って手に持ったビニール袋を掲げる神代に神裂は注意する。

「あなたは、私の攻撃をまともに受けた上に、『ドラゴンプレス 竜王の殺息』に、『セント 聖ジョージの聖域』、さらには『ラグナロク 終末の光』まで受けたんですよ！！
かなりの使い手の魔術師もあれだけ食らえばどうなるか分からないものを素人のあなたが受けたのですから、ちゃんと休んでないと！」

「……………うるさいなあ」

神代はふざけた感じで耳を塞ぐが、その行為が神裂の怒りを買った。

「分かりました…、なら、寝ていても痛みが襲うようにしても宜しいですね…？」

神裂はゆらりと七天七刀を手にする。神代はその様子をみて顔を青くし

「わー！！ちょっと待って、神裂さん！？ほら、話を聞いてくださいー！！！」

「なるほど…、最期に言う事が決まったんですね…」

「ちょ…、なんかマジに聞こえるから怖いんですけど…。って、そうじゃない！！ほらこれ！これを見てくれ！！」

神代は自分の右腕を神裂に見せつける。その右腕は神裂に斬られた場所の中で一番ひどかった所だ。しかし、その腕には切り傷どころか手当の後まで消えていた。

「傷が、消えている？」

「そういうこと！俺ってばなんか回復するのが異常な早さなんだよ！」

「そうでしたか…」

神裂が七天七刀からてを離すのを見て神代はほっと息を吐いた。

「……………すみませんでした」

「は？」

神裂がいきなり謝ってきた事に驚く神代。

「私たちは彼女を救うためとはいえ、あなたや上条当麻に酷い事を
してしまいました」

申し訳なそうに頭を下げ謝る神裂に神代はコッソン！と軽く握った拳
骨で軽くたたく。

「馬鹿言うなよ、俺も当麻もお前もステイルも、みんなインデック
スを助けたかった。それを考えて行動しただけ、俺や当麻が怪我し
たのは俺たちが勝手に怪我しただけだ。あいつも俺もそこら辺に張
り巡らされた鋼鉄製のワイヤーに気付かなかったただけだ。お前のせ
いじゃないよ。神裂。」

神裂は神代の言葉を聞いて目に涙を浮かべていた。彼らはあれだけ
酷い目にあわせてきた自分たちの事を許す。と言ってきたのだ。

神裂は目に涙を浮かべたまま神代の顔を見る。

「今何と？」

「だから、怪我したのは俺たちのせいでお前らには何の罪も責任もないって言ったんだよ」

自分が聞いた言葉が聞き間違いじゃなかったという事が分かって、神裂は目に浮かべた涙を流し始めた。

神代は目の前でいきなり、自分が今までであった女性のなかで一番強いと思っていた女性が泣き出したのにビックリしてとりあえずハンカチを出して、

「とりあえず、その顔どうにかしろよ。せっかく美人なんだからさ。」

泣いたままじゃ台無しだぞ！」

地雷を踏んだ。

「……………！」

神裂は美人と言われた事に顔を赤くするが、目の前の少年に顔が赤くなっているのを見られたくはなかったので、すぐに後ろを向いた。

「……………次の仕事があるのでそろそろ行かなくてはいいけません」

「あれ？インデックスには会わねえのか？」

「あの子に私たちはひどい事をしてきましたからね…。彼女に会う資格は今の私にはありません」

「そうか…。なら俺が代わりに伝えといてやるよ」

「…!?!? 助かります…」

そう言って神裂は歩きだす。その後ろ姿に向かって神代は大声を出す。

「お前も困った事があったら、言いに来いよ!! いつ来てもいいからなあ!!」

「……考えておきます」

そう返事した神裂の顔は穏やかな優しい笑顔だった。

「さて、次はツと…」

神裂の姿が見えなくなり神代は病院の中を歩きある病室を目指す。

すると目当ての病室からカエル顔の医者が出てきた。神代はその医者に面会はいいいのかを聞いてみた。

「ああ、面会はいいよ。ただしあまりはしゃぎ過ぎないようにね」

「分かっていますって…。こっちも怪我人なんですから…」

神代は、ビニール袋の中を確認しながら病室のドアをノックする。

「はい？」

中から上条の声が聞こえたので、神代は中に入る。

「よ！大丈夫そうだな」

神代はワザとらしく明るい声であいさつをした。

「あ、ああ」

上条はぎこちなく返事をする。神代は上条の違和感を感じたが、す

ぐに切り替え、手土産のジュースやポテトチップスを渡す。

「なんだよ、親友が見舞いに来てやったのにその暗さは？」

「いや、なんとなく…、ね」

上条はバツの悪そうな顔をした。神代はいてもたってもいられず、聞いてみた。

「なあ、お前なんか変じゃないか？何かあったのか？」

「……………、なあ、お前さ、俺が記憶喪失だって言ったらどうする？」

上条の意外な質問を聞いて呆気にとられる。

「まさか…、お前…あの羽のせいで……………」

神代は恐る恐る聞いてみると上条は…

「なあーんてね！引っ掛かった引っ掛かった！！」

『ドッキリ大成功』の立て札を取り出し神代に見せつけた。

「は!？」

「いや、単純な事さ。あの羽は魔術で出来てたんだろ? つまりそれも俺の右手にかかれば木端微塵って事なんだよ!」

上条の暴露に神代は笑いだす。それにつられて上条も笑いだすが、上条は身の危険を肌で感じていた。記憶はなくても、身体が神代から発せられる殺気を感じ取っていた。

「当麻……」

静かに話し掛ける神代。

「な、なんだ？」

「一回、逝っとくか？」

「いや、それはちょっと…」

「大丈夫だ。ここは病院だ。死亡届を書くのには困らない」

「いや、そういう問題じゃ……！？」

その直後上条の身体がとび跳ねた。神代が電気ショックレベルの電圧を上条の身体に流したのだ。当の神代はいつの間にか病室を去っていた。

「…うう、不幸だ…、ん？」

身体の痺れが取れた上条は神代の手土産が入っている袋の中に一枚の紙が入っているのを見つけた。

「何だ？」

そこにはこう書いてあった。

『たとえば、お前がいなくなっても俺はお前を忘れない。俺はいつもお前の味方だ。困った事があったらいつでも言えよ。お前の親友の神代和樹より』

「…………よろしくな、親友」

上条は手紙を読みながら手土産の『ヤシの実サイダー』の蓋を開けようと指をかけた。そして、手紙に続きがあるのに気付き、空けてから読もうと指に力を入れ空けると、中からジュースが噴き出し上条の顔をベタベタにした。

「…………うう、不幸だあああああ！！！」

『追伸、ヤシの実サイダーは来る前に振っておいたから（笑）』

第十四話（後書き）

どうでしたか？感想等お待ちしております。

第十五話（前書き）

オリジナルの展開の話を挟みたいと思います

第十五話

「へえ…、荒川^{あいつ}レベル5だったんだ」

今日の日付は7月30日。インデックスを助けた後から約一週間が経過していた。

その間に、神代の財布は痩せていった。理由は隣の住人にある。神代の親友であり、隣の部屋に住む上条当麻がしばらく入院することになったからだ。（神代も入院していたのだが、彼はしばらく休養をとるという名目での入院だったのですぐに退院できた。）その上条が居候させているシスターこと、インデックスはもちろんその間放置されていた。

神代が退院した日に冷蔵庫の材料が切れており、ファミレスにも行くかーと思って外に出ると、なぜか部屋の前にシスターが倒れていた。神代は、あれ？デジャブ？と思いつつ声をかけた。思い返せばその行為が彼にとっての地獄の三日間となった原因だった。神代はシスター、もとい、インデックスに声をかけた。「飯食いに行くか？」と…

それから、神代の財布は日が続つにつれみるみる痩せていった。上条がこの事で限界に来ていた神代からとばっちりを受けたのはまた別のお話…。

それから今日はゆっくりと街で過ごすかと神代は思い、携帯を開いてニュースの一覧を見ていた。そのトップページにはこのような記事が載っていた。

『八人目の超能力者（レベル5）！グラビティカノン重力砲！！』

ここで冒頭の神代の言葉に至るのだった。

「順位は…、はは！超電磁砲^{レールガン}と同率で三位…。あいつも大変になるな！まあ知りあわなければ済む事か」

神代は携帯をポケットに突っ込み部屋から出る。

「ありゃー？シロやん、今日はどこに行くかにゃ？」

すると隣人の土御門元春が話し掛けてきた。

「ああ。ここん所忙しかったからな。休養も兼ねて街をブラブラと散策しようと思ってる」

「そうか、なら行ってくるにゃ。あ、でも気をつけた方がいいかもにゃ」

「気をつける？何にだ？」

神代は首を傾げる。

「ここん所、シロやん、カミやんと一緒にいたせいかわらないけど、入院したじゃないかにゃ。だから、カミやんの不幸スキルが乗り移ってるかもしれないって話」

「なるほど…、一理あるな…。気をつけるよ。じゃあな」

そう言って階段に向かって一步を踏みだした神代だが有ろうことかーブチッ！ーと靴ひもが切れ、その切れた靴ひもを踏みつけ突っかかり階段を転げ落ちてしまった。

「ふ、不幸だ…」

神代は靴を取り換え、改めて街に向かった。

その後ろ姿を見た土御門が「さて、シロやんの実力、見せてもらおうじゃないの」と小さく呟いた事は誰も知らない。

第十五話（後書き）

今回からオリジナルの展開を書いていきます。

感想等ありましたらおろしくお願いします

第十六話

「うーん…。この夏に公開予定の映画の機体か…。買うべきか買わざるべきか…」

神代は街の模型店の前で悩んでいた。（実は彼はかなりのロボットアニメ好きでその筋の人たちにはなぜか救世主と崇められていた。）そんな彼は今年の夏…、あと約二週間後に公開予定の『機動戦士ガンダム00』の映画に登場する機体のプラモデルを買うか買わないかで迷っている。普段の彼なら迷うことなく全種類まとめ買いするのだが…

「この間、インデックスに財布の中身、大半持って行かれたからなあ…」

今の彼の財布には食費代を抜くとそこまでのお金はない。故に神代は悩んでいたのだった。

「仕方ない、銀行でおろしてくるか…」

神代は後ろ髪を引かれる思いでその場を後にしたのだった。

——とある銀行——

「35番で御待ちのお客様」

そう呼ばれて受付に向かったのはこの学園都市での八人目の超能力者（レベル5）の荒川護あらかわまもるだった。

「お金を引き落してもらいたいのですが…」

「分かりました。では、こちらの書類に必要事項をご記入ください」

荒川は慣れた手つきでさらさらと書きこんでいき、その用紙を受付に渡した。

「では、しばらくお待ちください」

荒川は受付係が戻ってくるまで、一週間前に起こった不可解な事件の事を思い出していた。彼もわずかとは言え、魔術をその目で見てしまい、その事が頭から離れないのだ。しかし、荒川はこうして深く考える時間は初めてのようないた。彼もまた、幻想触手^{レベルアップ}事件に関わり、その捜査に協力し時間が取れていなかったのだ。

パンツ！

という乾いた音が彼の背後からした。荒川はすぐに反応し、背後を見ると、一人の青年が近くにいた女の子を人質にとり天井に向かって銃を構えていた。

「金を出せ、おかしいな真似したらこいつがどうなってもしらねえかな」

「ちっ…！強盗か…！」

強盗犯は全部で三人。一人が少女を人質に、もう一人が受付に銃を突きつけ、最後の一人は荒川の近くで周りを警戒していた。それれどこから仕入れたのか分からない銃を持っていた。

荒川がちらりと受付に座っている中年男性のほうを見ると、何かのボタンを押したのが見えた。その瞬間に入口のシャッターが閉まった。

（何！？こんな状況でシャッターを下ろすボタンを押すなんて！？馬鹿か！！）

荒川が視線を犯人に戻すと、犯人は少し焦っていた。それは当然の反応だろう…。銀行のシャッタージャッシメントが降りるといことは何かが起こったということで風紀委員アンチスギルか警備員に自動的に通報されるからだ。

「くそ！誰だ！こんなことしやがったのは！出てきやがれ！！」

もちろん、そんな事を叫んだところで、押した本人がこのこ出ていけば何されるかわかったものではないが、あろうことか、声が上がった。

「あー、はいはい。それやったの俺だ」

荒川達のちょうど反対側から声が上がった。それも、荒川が知っている声だった。

「てめえ！どうなるかわかってんだろな！？」

少女を人質にとった男が怒鳴るが、現れた青年もとい神代は怯まず、答える。

「分かってるさ。お前らが捕まる。至極簡単な事さ」

「てめえ、俺たちが人に手を出さねえと思ってんのか!？」

受付に銃を突きつけていた青年が神代の後頭部に銃を突きつける。

（ヤバい、どうすんですか!？神代さん!！）

「はい、そこ間違い。正確に言うとならないじゃなくて、出せない
だな」

「はぁ？それはどういう意味…うわ！？」

その瞬間、神代に銃を突きつけていた犯人が派手に吹っ飛んだ。否、神代が後ろ回し蹴りを犯人の腹に叩き込んだのだった。

「てめえ！！」

人質を取っていた男が神代に銃を向けるが、神代は自分の履いていた靴を飛ばし、相手を怯ませその隙に近づき犯人の顔面に渾身のストリートを叩き込んでいた。

「くそ！！冗談じゃねえぞ！！捕まってたまる、か…！？」

最後に一人残った犯人は逃げ出そうとするが、床に這いつくばる。

「逃がすと思うんですか？」

荒川が、自分の能力を使い犯人にかかる重力を普段の十倍の負荷がかかるようにしていた。

「お、荒川じゃないか。奇遇だな」

犯人を持っていた縄を使い縛り上げた神代が荒川の方に歩いてくる。

「強盗にあった所で奇遇も何ありませんよ……」

荒川はあきれた様子で答える。

「でも、すごい動きですね。なんかこう…、流れるような動きで」

「ん？　そうか？　俺はそんな事考えずにやってきたからな…」

「そうなんですか？　だとしたらとてもすごい事ですよ」

「まあ、とりあえずこいつを縛ったらトンスラこかせてもらおうわ。
ジャッジメント
風紀委員に見つかるど面倒だから」

神代が面倒そうに頭を掻く。荒川もその意見には賛成した。

「そうですね。じゃあ、僕が縛っておくので他のみなさんにその様に言っておいて下さい」

「分かった」

荒川は地面に未だに這いつくばっている犯人の顔面を殴り気絶させ、神代から預かった縄を使いあらもない格好に結んだ。後で他の客が言うには「あんな結び方は初めて見た」という事だった。

「よし、それじゃ行くか」

「そうですね」

神代はシャッターに手をかざし、シャッターの一部をドアに変え外に出る。そこには大勢の人が見物していたが、神代と荒川はそれらをスルーし、銀行から去って行った。

第十六話（後書き）

感想お待ちしております

第十七話

所変わってとあるファミレス…

「なるほど…。お前も大変だったな…。転入早々幻想触手^{レベルアップ}なんてな…。あ、チョコレートパフェ一つ追加で」

今、神代と荒川は銀行からそれほど離れていない近くのファミレスに来ていた。

「大変でしたよ…。まあ、充実した生活を送りたかったからちょうど良かったんですけど…。って、まだ食べるんですか!？」

荒川は真面目にツツコミを入れる。神代は「えっ?なんで?…」みたいな顔をしていた。

「どれだけ食べるんですか!?!あなたはあれか!?!ハラペコキャラなんですか!?!」

ツツコミを入れられている神代の前には空になった皿が所狭しと並んでいた。

「仕方ねえだろ！！ここんところ暴飲シスターさんのせいでまともな飯食ってなかったんだから！！」

神代は先ほど頼んだチョコレートパフェを食べながら言う。

「まあ、そんなに忙しければ退屈もしないだろ？あ、ただし…」

「ただし、なんですか？」

「超電磁砲^{レールガン}こと、御坂美琴には気をつけろよ？お前はアイツと同率で第三位になったんだ。あの戦闘狂に見つかったら毎日追い回される事になる…ん？どうした？」

神代は目の前でorzしている荒川を見た。

「できれば最初に言って欲しかった…」

「まさか…、既に知り合ったのか…？」

神代は恐る恐る聞く。荒川表情はブルーなままだ。

「…なんと言うか…、知り合ったその日になぜか僕の携帯のアドレ

スをゲットされていました…」

「あつたその日に！？まあ…、頑張れ」

神代が酷くブルーになっている荒川を励ます。その時、虚空から一人の少女が現れる。

「やっと見つけましたの！さあ、荒川さん！ちょっと、一緒について神代さん？」

「「白井？」」

神代と荒川の声がハモる。

「神代さん、白井を知ってるんですか？」

「ああ。一年くらい前だったかな？白井がまだ風紀委員の研修中「研修中ではありませんでしたわ！！」に同じ銀行にいてな、そこが強盗にあつて、白井がやられている所に俺、参上みたいな？」

白井の抗議をスルーし、荒川に話す神代。

「お前は どうして 知り合っ たんだ？」

「簡単に言 うと、逮 捕 され ました。しか もこっ ちは無実 だっ たのに
…」

「ちよ っと、荒 川 さん！？ なにを おっ しや いま すの！？」

「なる ほど、つ まり は 冤 罪 事 件 だ な…。こ れ は 風 紀 委 員 本 部 に 伝 え
れ ば 白 井 は ク ビ に な る な…」

勝 手 に 話 を 進 め る 二 人 に 対 し、白 井 の プ ラ イ ド は ズ タ ボ ロ に 引 き 裂
か れ て い た。

「こ の 方 々 は 人 の 自 尊 心 を ボ ロ ボ ロ に し て い る 自 覚 が あ る の で し ょ
う か…？」

し か し、い つ ま で も 落 ち 込 ん で い る 白 井 で は な い。

「お 二 人 と も、少 し お 付 き 合 い 願 い ま す わ」

白 井 は 二 人 の 肩 に 手 を 置 く と、す ぐ に テ レ ポ ー ト し た。

「えっ…!？」

「ちよっ…!」

この瞬間、二人は強盗犯を捕まえた市民から食い逃げ犯になった。

……………風紀委員第177支部

「さ、着きましたわ」

「着きましたわ、じゃねえよ!! なんて事してくれたんだ!？」

テレポートした瞬間に白井に文句を入れる神代。

「どうかなされましたの？」

「どうもこうもねえよ！てめえのせいで俺たちは食い逃げ犯になっちまったじゃねえか！！」

「大丈夫ですわ、風紀委員の調査の協力だと言えば…」

「職権乱用じゃないですか…。ところで、どうかしたんですか？」

荒川が無理やり話を戻した。

「実は…」

支部の中にいた初春が口を開いた。

「御坂さんが変な視線を感じる、と」

「視線？そりゃ、アイツは有名だからな」

「そういう物じゃないらしいですよ。それに、知名度なら今は荒川さんの方が上ですわ」

「そうなのか？」

神代は隣にいた荒川に聞く。

「そうらしいですね。ぽつと出だレベル5でしかも、超電磁砲と並んで第三位。しかもレベルアップ事件の解決に貢献してしまいましたから…」

「ふーん。で？そういう物じゃないっとういう事だ？」

神代は白井に聞く。

「なにやら、誰かに見られている感じだとおっしゃっておいりましたわ」

「で、僕たちを呼んだ理由は？と言うか、なんで神代さんも連れてきたんですか？」

「あなた方の考えを聞いてみたいのですわ。それに、神代さんは私が認めた数少ない殿方。彼には何度も助けられましたから」

「さいですか」

「それで、どうですか？」

「そうだな…、誰かに見られているなら、本当にそうなんじゃないのかな？」

荒川がすぐに答えるが白井がすぐに否定する。

「それはありませんわ。お姉さまの近くに人影はありませんでしたの」

「それに、御坂さんみたいな視線を感じた人が、他にもいるんですよ」

初春のその言葉に神代は引っ掛かった。

「初春、その他の被害者の能力はわかるか？」

「えっ？ あ、はい！」

すぐに調べだす初春。その結果はすぐに出た。

「出ました！全員、電気操作系の能力者です。でも、それがどうかしたんですか？」

「なるほど…。多分、御坂に視線を感じさせている犯人は何らかの方法で御坂のAIM拡散力場に干渉して視線を感じているようにしてるんだ」

「なるほど、それなら…」

「俺ができるのはここまでだな。後はアイツの友達のお前らがやるべきだ。もちろん、荒川も手伝ってやれよ？」

そう言って、神代は出ていこうとする。

「神代さん！ありがとうございますわ」

神代は振り返り、

「白井、貸し一だからな。忘れんなよ？」

「ハイハイ…。わかっておりますわ」

「じゃあ、頑張れよ」

神代は風紀委員第177支部をあとにした。

…数時間後

「すっかり遅くなっちゃったな…。これじゃ、飯はコンビニ弁当か？」

神代は夜の街を歩いていた。彼は今まで、街で遊んでいたのだが、時間を見ると完全下校時刻を過ぎていたので、寮に歩いて帰る事になったのだが…

「また、人がいない…。また魔術か…？」

彼の周りには人が一人もいなかった。神代はこの原因がなにかを知っていた。

『魔術』…。それは、科学では説明できないもの…。『才能ない人間』が『才能ある人間』と同じような事をするために作られた儀式と術式。それが魔術。神代は少なからず、それに関わった事件に係っていた。

「出てこいよ。魔術師。いるんだろう？」

神代は近くにいた魔術師に呼び掛ける。

「やっぱりバレるか。まあ、そうじゃなけりや、聖人を打ち負かすことはできないからな…」

暗闇から出てきたのは、神代と同じぐらいの年の青年だった。

第十八話

「やっぱりバレルか。まあ、これくらいの魔術を見破られないなら聖人を打ち負かすことはできないからな…」

暗闇から出てきたのは、神代と同じぐらいの年の青年だった。

「誰だてめえ…」

神代は警戒し、殺気を放ちながら訪ねる。

青年は軽い感じで答える。

「俺？俺は紅瑞季^{しぐれみずき}だ。悪いがあんたの事を良く思っていない奴に頼まれてね。痛めつけるか、最悪、殺してもいいって言われてるんだ」

紅は右腕に着けた籠手の様なものを構える。その籠手には先端に二本の板状の突起がついていた。

「おいおい…。俺はいつの間になつたんだ？俺はただの高校生だぜ…？」

神代は近くにあった道路標識を変化させ、一本の大太刀を造り出す。

『王剣、ライキリ』

神代が現在はまっているゲームで使用可能な武器。神代はこの大太刀の刃の部分に雷を纏わせている。

「へえ…。あんたも雷を操れるんだ…」

そう言う紅の籠手の突起が左右に開くと籠手の中央から雷の刃が出現した。

「『雷光小手』^{らいこうこて}。俺が造り出した、世界に一つしかない武器だ」

「魔術師でも武器を使う奴って神裂だけかと思ってたよ」

「神裂…。イギリス清教所属の『必要悪の教会』^{ネセサリウス}所属の魔術師か…」

あっさりと答える紅に神代は驚く。

「お前、アイツのこと知ってんのか？」

「知ってるってただだよ」

「そうか…。できればそこを通してくれないか？早く帰って休みたいんだ」

「それは無理だねっ！！」

紅は雷の斬撃を放つが、神代はライキリで斬撃を切り裂く。

「やるねえ…！なら、これならどうだい！？」

雷光小手の突起が前に閉じ紅が神代の方に向けると刃が出ていたところから雷がレーザーの様なものが放たれる。

「まるでビームライフルだな…」

そして、雷光小手から放たれた雷撃は神代に当たり、道路を粉碎し、土煙をたてた。

「おかしい……。当たったのに手ごたえが全くない……!?!」

紅は、神代の姿を見つけるために土煙の方に意識を向けた。そのため背後への注意力が散漫になり背後から近づく気配に気付くのが遅れた。

「……………!?!」

だが、流石は武器を扱い、接近戦を得意とする魔術師。背後からの気配に間一髪で反応し、その人物の攻撃を『雷光小手』から出現させた雷の刃で受け止める。そんな紅を攻撃したのはたった今、紅の攻撃を受けた神代だった。しかも、武器も大太刀から、彼の最も得意とする槍に変化していた。

「てめえ! なんでここに!?! さっきまであそこにいたはずじゃ!?!」

「ああ、悪い。あれは俺が蜃気楼で作った偽物だ」

「は！？てめえそんな事も出来るのかよ！？聞いてねえぞ！！」

「だって言っていないもん」

なぜか激怒する紅だったが、神代は相手を挑発するような言動をとる。

「ちっ…！だったらこのまま直接斬りつけてやる！！」

紅はその体からは考えられないような力を出し、神代を押し切る。神代はその力を利用し後ろに大きく跳ね、着地するが、その目の前には紅がいた。

「は…！？」

「もらった!!」

紅は至近距離から先ほど放った雷撃を放つ。しかし、神代は槍を持っていない左手を前にかざすと、そこを境に雷撃が何かに集められるように左手に集まり、そのまま球状になった。

「なに!?!」

「あぶねーあぶねー。まさか対ビリビリ戦法が役に立つとは…」

神代が行った事を簡単に説明すると、彼の能力『状態変化』は物体・物質のすべてに作用する。それは雷も例外ではない。（専門的な事は作者は分からないので、ここではご都合主義で…）神代はその特性を利用し、相手の放った雷撃を球状に押し込めた、と言うことだ。

「とりあえず、返すぞ。これ」

「くそ!!」

紅は距離を離そうとしたが、神代は、紅の懷に潜り込み手にした雷撃の球を紅の腹に当てる。

「ぐっ!!」

当然、紅は感電し、膝をつくが普段から雷の魔術を扱っている紅にはこの程度の電撃はあまり効果がなかった。

「やっぱり、あんま効かないか…」

「なめんじゃねえぞ……。これからだよ……」

紅は懷から、何枚かの御札を出し、自分の周りに展開する。それらの札は紅の身体の周りを囲み、その下の地面にはボウ……と光が始め、円を作りだし、円の中で、紅が雷の刃で何かの術式を組み立てたのが見えた。

「天より我らを見下ろす雷の神よ、雲を操り、土地に豊饒をもたらす風の神よ……。哀れな旅人に安息を与えるために我に力を……！」

紅が術式を完成させ言霊を唱え終わると、紅の周りに風が吹き出し、それもすぐに目も開けられないほどの強さになる。

「……つつたく、魔術ってのはほんとに何でもありだな……」

風が弱くなり目を空けた神代の目の前には右手に先ほどの『雷光小手』よりも力強そうな黒色と金色の籠手、左手には緑色の籠手を持った紅がいた。

「さあ、第二ラウンドと行こうか!!」

その瞬間、紅の驚異的な脚力が地面を蹴った。

第十八話（後書き）

文章短くてすいません!!

第十九話

「グッ!？」

神代は跳躍してきた紅の斬撃を槍を使ってさばいていたが、紅の動きは先ほどまでとは違って、無駄のない動きになっていた。しかも、相手の武器は先ほどまで使っていたものよりも強化されて、しかもそれが二本になっており、確実に神代を苦しめていた。

「そらあ!!！」

「グッ!!！」

神代が紅の斬撃を避けるために距離を離すと、紅はすぐに雷や、風を圧し固めた弾を放ち、反撃の隙を与えなかった。

「くっ…、そ…おおお!!！」

神代は紅の砲撃を身体を捻り、ギリギリで避けるが、紅は弾丸を放った直後に神代に接近しており、無防備になった神代を蹴り飛ばす。

「ガッ…!? 痛うゝ!!」

蹴り飛ばされた神代の身体は道路標識にぶつかり神代は鈍い痛みを堪える。

「さて、そろそろ終わるかな…!」

そう言う紅は右腕を神代に向けた。その右腕に着いた籠手にある二本の突起がガシャンと開き、開いた部分に光が集まっていく。

『おいおい。なんか凄いことになってんな…?』

神代の頭の中で声が響いた。

声の主は神代の中に存在する、守人だった。

「何のようだ! こんな時に!?!」

『こんな時だからこそだ。身体を借りるぞ!』

「はっ!? ちょっと…!」

神代は抗議するが、守人は神代から身体の主導権を奪い、意識が入れ替わる。

「お前じゃ、あれは受けきれねえよ。それにしても、何で槍こんなものを使う

んかねえ？」

守人はそう言うのと槍を投げ捨て、両手に炎の剣を造り出す。

「充電完了…。さあ、地獄で悪魔がお待ちかねだ！」

紅の右腕の籠手には今にも放たれんとした光球が出来上がっていた。その光球は凄まじい光を放っており、夜の街を昼間のように照らしていた。

「くたばれ!!」

紅の叫びと共に放たれた光球だが、守人は炎の剣を交差クロスさせ、真正面から受け止めた。

そして、光球は爆発し周りを爆風が襲う。

「……………!!」

紅は煙が晴れていく中で、立っていた神代もとい、守人を見て、驚愕する。

普通では触れるだけで人どころかダイヤモンドですら融解する程の威力の魔術をぶつけたのだ。

その威力は並みの聖人でも受ければただではすまないものだ。
しかし、目の前な少年は無傷で立っていた。

「まあ、なかなかの魔術だな…。オレじゃなかったら死んでたな」

守人は手にした炎剣を振るう。
その動作だけで道路が溶ける。

「まさか、あれを止めるなんてね…。驚いたよ…！」

紅は両腕の籠手から雷と風の剣を出し、守人に向かって斬りかかってきた。

「負け惜しみか？」

守人は右腕の炎剣のみで紅の攻撃を受け流す。

「ほざけ…！」

「まあ、仕方ないな。相手がオレ達だったからな！」

守人は受け止めていた紅の剣をはね上げ、蹴りを叩き込む。

「グッ…！」

紅は道路を転がる。

そんな紅に守人が面倒そうに告げる。

「オレもそんなに気が長くねえんだ。まだ向かって来るなら、それなりな怪我をするぜ？」

「くっ…！」

紅は膝に手を置き、立ち上がる。

「まだ来るってか…。わかったよ。すぐに終わらせてやる…！」

次の瞬間、二つの影が重なり、片方の影が倒れた。

「……………生きてる…?」

紅は目を覚ました。

ただし、神代と戦った場所とは別の場所だった。

「目、覚めたか？」

紅に向かって一人の男が近づいてくる。金髪でサングラスをかけ、アロハシャツという格好だ。

紅はその男をよく知っていた。

「土御門……」

歩いてきたのは神代のクラスメイトの土御門元春だった。

「それで、どうだった？ 神代和樹は…?」

「見ればわかるだろ…? そりゃ、俺には神の力なんて無いけど、一人の聖人だ。それを殺さずに倒したんだ、結果はわかるだろ？」

「つまり、予想通り、神代和樹は『聖人』の一人である可能性が高いってことか…」

「いや、違う。あいつは確実に『聖人』だ。それかなり力の高い神の力を秘めている…」

紅は立ち上がりながら言う。

「まあ、あの實力なら神裂ちゃんの隣にいても、神裂ちゃんを悲しませることはないと思うぜ」

紅が神裂の名前を出したので、土御門は首を傾げる。

「？何でそこで神裂ねーちんの名前が出てくるのだにゃ〜？」

「な〜んかさ、最近神裂ちゃんがあいつの事を何度も話すんだよ。神裂ちゃんは気づいてないと思うけど、かなり嬉しそうに」

土御門は紅の答えに納得がいったようだ。

「なるほどにゃ〜。でも、かなり長引くだろうにゃ〜。シロやん、意外に鈍感だから…」

「そうか…。なら、俺にもチャンスはあるかもしれないな！」

「にゃ〜？瑞希はそっちの気があったのかにゃ〜？」

茶化す土御門に紅は反論する。

「バカヤロウ！俺はそっちの気はねえ！！と言うか、俺は女だ！！」

「わかってるにゃ〜。でも、その男勝りな性格と格好は変えた方がいいと思うけどにゃ〜？」

「仕方ないだろ！周りが男ばかりの環境で過ごしてきたんだから…」

「まあ、それはおいといて…。とりあえず、神代和樹アイの事はまだ最大教主にはまだ伝えない方がいい」

「わかってるよ。それじゃ、また会おうぜ！」

紅はそれだけ言うと、去った。
残された土御門は一人で呟く。

「さーて、これからが大変だぜい。カミヤん、シロヤん」

土御門もまた去っていく。学園都市の暗闇の中に…。

第十九話（後書き）

感想お待ちしております。

オリキャラ紹介？

守人

神代の意識の深層に潜んでいる意識だけの存在。神代の自分を犠牲にしても誰かを守りたいというある意味負の感情の塊と自分は考えている。

神代に比べてかなり好戦的な性格だが、相手を殺したりはせず、圧倒的な差を見せつけて相手の戦意を喪失させることで勝利を得ようとする。

宿主である神代の意志を尊重するが、神代に命の危険が迫った時に自分から神代の意識と入れ替わる。

くれないみずき
紅瑞希

性別 女

年齢 15歳

身長 172 cm

体重 ? kg

武器 『雷光小手』
らいこうのこて

イギリス清教 『必要悪の教会』
ネセサリウス 所属の魔術師。

性格は幼い頃に周りが男ばかりの環境で育ったために女の子らしさはほとんどなく、男勝りな性格をしている。

服装も、どちらかと言うと男物な物が多い。

神裂や土御門等の『必要悪の教会』のメンバーと仲がよく、神裂の事を『神裂ちゃん』と呼ぶ唯一の人物

また、世界に二十人ほどしかいない聖人の一人で、ローマ清教で言う『神の力』
テレスマ はほとんどないが、持ち前の運動能力と、自作の魔術でその分をカバーしている。

『雷光小手』を使った戦いが得意で、接近戦から射撃までを全て行えるオールラウンドな戦いをする。

第二十話（前書き）

PVがいつの間にか70000を突破していた…。

これからもよろしくお願いします！！

第二十話

「何でてめえが俺の携帯番号を知ってんだよ…?」

八月八日、神代は一人、部屋で溜め込んでいた宿題を徹夜で終わらせていた。

普通ならこの時期に徹夜までして終わらせるものではないのだが、神代は中途半端に終わらせるのが好きではない人なので、三日三晩徹夜で全ての宿題を終わらせたのだった。

そこで、三日ぶりの惰眠を貪ろうとした時に、彼の携帯が鳴り出した。

通信相手は神代が知らない番号であったから、神代は無視してソファーに寝て意識を手放そうとしたが、携帯はしつこく鳴り響た。

堪忍袋の緒が切れた神代は携帯に出ると、叫んだ。

「しつこいんだよ! こっちは忙しいんだから!! 考えろ馬鹿アホ間抜け!!、と。」

『全く、久しぶりに声を聞いたと思ったらいきなり罵声とはね…。さすがの僕も電話を握り潰すところだったよ』

神代の意識は携帯から聞こえた声…、イギリス清教の魔術師である

ステイルⅡマグヌスの声を聞いて覚醒した。

そうして、冒頭にいたる。

『至極簡単な事さ。神裂から聞いた』

「…（そういえば、あいつは俺の携帯番号を知ってたな…）、それで、イギリス清教の神父様がなんのようだ？ 暇になったから遊んでほしいのか？」

神代は惰眠を貪るチャンスを奪われた恨みを晴らさんとステイルを挑発する。

『そんなことはどうでもいい。それより、仕事だ。今すぐ駅前の広場に来い』

神代の言葉をスルーし、神代を呼びつける。

「また、魔術関係かよ…。勘弁してくれよ…。今度はなんだ？ この間に変な奴に襲われるわ、電撃を飛ばされるわ大変だったんだ…。あまり大変な事は勘弁してくれ」

『…その魔術師の事をよく教えてくれないか？』

神代はステイルに先週出会ったある魔術師の事を伝えた。

『わかった…。いつか連行するからその事はこれで終わりにしてくれ…』

「……………？まあ、いいけど」

ステイルの言い方に疑問を抱いた神代だったが、気にせずに了承する。

「それで？今度は何をするんだ？」

『ある人物の救出』

ステイルの言葉を聞いて、神代はすぐさま拒否しようとしたが『拒否権はないからね。拒否したいなら、そのアパートに置いた『魔女狩りの王を発動させるけど…』』

「……………、わかった！行けばいいんだろ！？行けば！！」

アパートでイノケンティウスなんかを発動させられたらたまったものじゃない、と神代は考え、即答した。

『できるだけ、早く来てくれよ』

神代はその言葉の途中で携帯を切ると、靴を履き、広場に向かった。

第二十一話

「公園前の広場ねえ…?」

スタイルに呼び出された神代は一人で広場に向かっていた。
そんな神代に一人の青年が声をかける。

「すまない」

「ん…?」

神代は後ろからかけられた声に反応し、その青年に気がつく。

「少し、道をうかがいたいのだが…」

神代はその青年を観察する。

髪は黒色でウェーブがかかっていた。

肌の色も日本人よりも黒く、彼がこの学園都市の中で目立つ理由の一つになっていた。

「いいですよ。何処へ?」

「三沢塾と言うところなんだが、道に迷ってしまったんだ」

青年は頭を掻きながら答える。

「三沢塾……？講師か何かですか？」

青年はすぐには答えず、間をあけて答える。

「まあ、似たようなものだ」

「わかりました。三沢塾は確かこの道をしばらくまっすぐに進んで、大通りに出たら見える大きなビルですよ。ビルが四つ建っているからすぐに見つかると思うけど……」

「わかった、助かった」

青年は素直に礼を言うと、頭を下げた。

「かまいませんよ。困っている人がいたら助けるのが俺の信条だから」

「そうか……。じゃあ、俺は行く。また会えるといいな。お前とは話

が合いそうだ」

「そうですね、じゃあ俺はこれで」

神代は青年に背を向けると広場に向かって歩き出した。

神代が去って、青年は三沢塾に向かう。

「待っている、俺がお前の『歪み』を破壊してやる、アウレオルス
||イザード…!」

青年は一人敵地へ向かう。

「遅かったね。何をぐずぐずしてたんだい？」

広場に着くとステイルの文句が飛んできた。

「道を聞かれたから、答えてたんだよ。それより、何で当麻がいるんだよ」

ステイルの隣にいる上条を指差して神代は聞く。

「彼の右手は便利だからね。それよりも資料を…」

資料を渡そうとするステイルを神代は手で止める。

「助ける人物の名前、顔、それからそいつが囚われている場所の見取り図。それだけ有れば十分だ」

「それだけでいいのかい？」

「人助けに他にどんな情報があると？」

「まあいい。これが助ける人物の顔写真だ」

ステイルは神代に写真を渡す。

そこには黒髪の少女が写っていた。

「彼女の名前は姫神秋沙^{ひめがみあきさ}。彼女の別名は吸血殺し^{ディープブラッド}」

「吸血殺し…?」

神代は首を傾げる。

「彼女はちょっと特殊な能力を持っていたね。その能力を狙われて囚われているんだ。これが、その場所の見取り図だよ」

「ここは？」

神代は見取り図を見て、ステイルに訪ねる。

「三沢塾という予備校の一つさ。元々は科学宗教だったんだけど、最近本物の魔術師に乗っ取られたみたいなんだよね」

「ちょっと待て。三沢塾だって？」

「うん？ そうだ。知っていたのかい？」

「知ってるもなにもさつきそこに向かって行った奴がいたんだけど…」

「なに？そのバカな奴の特徴を教えてくださいませんか？」

ステイルがイライラした様子で神代に訪ねる。

「ウェーブのかかった黒髪で…もういい。そいつが誰かわかった…は？」

「で、そいつは味方なのか？」

話に参加していなかった上条がその青年が味方かどうかを訪ねた。

「味方だよ…。ただ、ちょっと扱いづらいのさ」

「へえ。で？どんな奴なんだ？」

「名前はレインⅡイブラヒム。僕たち『必要悪の教会』ネセサリウス所属の魔術師だ。

ただ、彼は過去に何らかの出来事があったみたいでね、人とあまり関わりを持つとはしなかったんだ。まあ、彼によってって無理矢理人間関係を築いた奴もいるけど」

「そんな奴がどうして三沢塾に？」

神代は青年の顔を思い出しながらステイルに聞いたがステイルの答えは呆気ないものだった。

「さあね。それより、早く行こうか。時間がない」

「「時間…？」」

「あいつは僕たち『必要悪の教会』ネセサリウスの中でも仕事を終わらせるのが早いんだ。その理由がわかるかい？それはあいつは自分の仕事を邪魔する存在を排除するのに容赦がないからだ」

「は…？」

ステイルの言っていることについていけない上条は首を傾げる。

「普通、僕は仕事をするにしてもできるだけ穏便にすませるんだけど…、あいつは違う。仕事を邪魔する者が誰であろうと排除するんだ…。つまり、普通は被害を回避する分、時間がかかるが…」

「被害を考えなくていいからその分時間がかからない…」

ステイルの言葉に神代が続ける。

「ってことは、早くしないとヤバイってことじゃねえか!？」

上条がステイルに叫ぶ。

「だから、さっきからそう言ってたんだけどね。でも確かに、奴の目的が何なのかわからない今、早く行かないと僕らの仕事なくなるかもね」

ステイルの言葉の本当の意味を理解した神代と上条はステイルを引っ張り三沢塾に向かっていく。

第二十一話（後書き）

はい、新キャラ登場しました。

モデルは某ロボットアニメの主人公です。

感想等よろしくお願いいたします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5881q/>

とある魔術の錬金術師（アルケミスト）

2011年8月31日13時29分発行